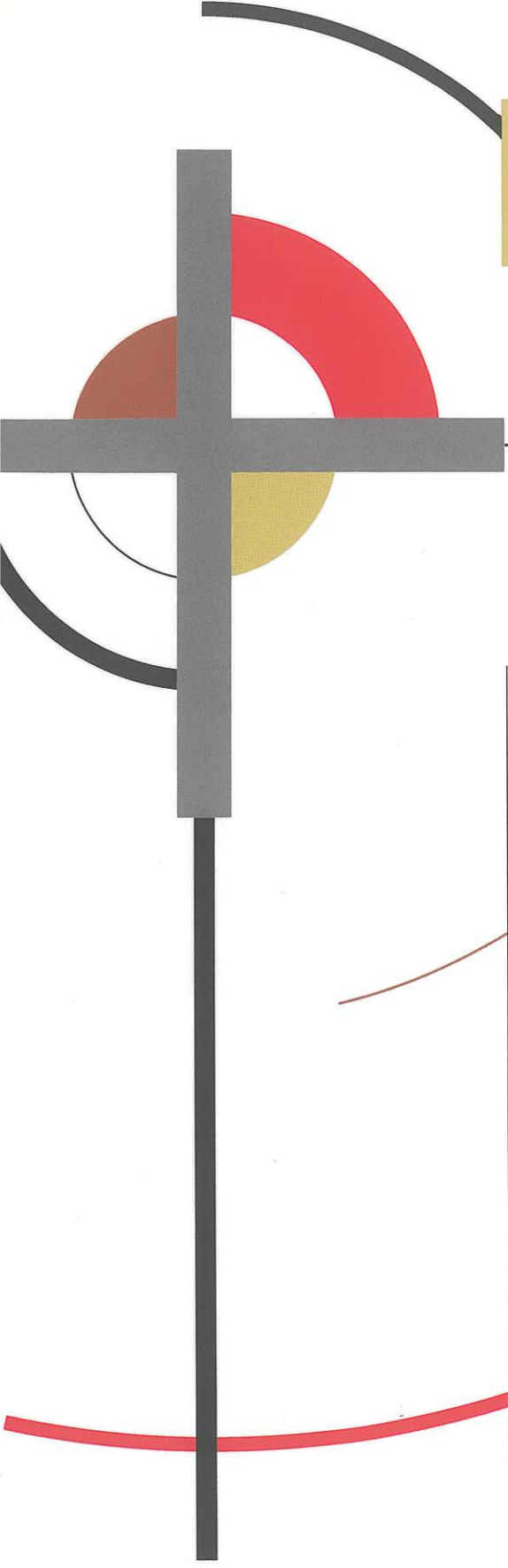
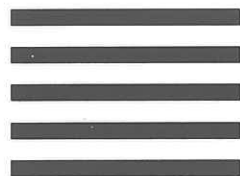




K・A・P くまもと国際建築展
くまもとアートポリス'92



八代まちなみ展
YATSUSHIRO
STREET EXHIBITION

KUMAMOTO ARTPOLIS '92

オープニング

ちょっと、キンチョ〜?



りりしく! 美しく!

カラーガールズ



まっすぐほってるなナ??

ボーイスカウト





じゅんぽーじゅん

やっぱりカオはこれかな??



つま...
つま...



パネラーの貴重なおはなしでした。

ギャラリー

こんな街いいサッ！
できたらいいサッ！



街全体が
ギャラリーに!!



屋内展示

あっ！
いいもの
見つけた。

ガメが走りぬけた...



緑のコンサート



心、静かなひとときでした...



ダンシング

エキゾチック
あんど
ど迫力!



序 章

記念誌発刊によせて



八 代 市 長
沖 田 嘉 典

厳しい残暑が続く8月17日から1週間、市内中心部一円を会場に繰り広げられました「八代まちなみ展」は、来賓の皆様方をはじめ関係各位の、御尽力と御協力とによりまして、大成功を収めることができました。

ここにあらためて深く感謝の意を表します。

21世紀まで残り僅かのカウントダウンとなった今、関係機関はもとより、まちづくりについての考えや立場を異にするあらゆるジャンルの皆さんが、それぞれの立場から知恵を持ち寄り、八代の将来のまちづくりへの夢を語り合って作り上げられました「八代まちなみ展」は、誠に意義深いものでありました。

ご承知のように、県当局では「後世に残せるものは文化しかない」との考えから、世界の英知を結集し、文化的資産となる質の高い建物の建設を促進し、熊本の環境デザインの向上をめざそうと「くまもとアートポリス'92」の事業を展開されております。

「八代まちなみ展」も、11月に開催されますこの「くまもとアートポリス'92」の前夜祭としての催しでありましたが、関係各位のご努力で、市民総参加の総合的な文化活動といえるまでの高まりをみせ、まさに「手作りのアートポリス」と呼ぶにふさわしいイベントとなりました。

我がまち八代は、その歴史を遠く奈良時代の「日本書紀」の中に見出し、「和名抄」に

も夜豆志呂の文字が見られます。江戸時代松井氏の八代城築城によって、八代の原型ともいえる城下町が形成され、藩政時代から今日まで干拓でもたらされた40㎢におよぶ新しい土地や、幾多の変遷を経て現在の町並ができております。また、本市にはカッパ渡来の伝説、八代妙見祭に神幸行列に見られる亀蛇にまつわる妙見信仰など、神秘でロマンに満ちた歴史が伝えられております。

本市では市民の皆様一人ひとりが、豊かで安らぎのある快適な生活を享受できるまちの実現をめざし、鋭意努力いたしておりますが、更にこのような歴史的背景を考証しながら、新幹線や高速道路などの近代的なまちづくりとの同化昇華を図り、夢とロマンあふれる21世紀の八代をめざしたいと考えております。

記念誌の発刊が「八代まちなみ展」での、あの感動を再び呼び起こし、よりよいまちづくりへの一石を投ずるものとなりますよう、お願いいたします。

発刊を祝って



八代市議会議員
加 藤 忠 昭

皆様にはますます御健勝のことと存じます。

さて、くまもとアートポリス'92 八代まちなみ展が、8月17日から同月22日までの6日間にわたって開催され、その記念誌が発刊されることになりました。

今回のイベントは熊本県が推進している地域文化の向上を図り、現代にふさわしい質の高い生活環境を創造して、後世に伝えいくための「くまもとアートポリス構想」の一環と



して本市において実施されたものですが、皆様方の並々ならぬ御尽力、御協力によりまして大成功を収めることができましたことは、御同慶の至りでございます。

今回のくまもとアートポリス'92 八代まちなみ展には、多くの団体が御参加戴き、未来の中心商店街、駅前の再開発、八代城と博物館のまちづくり、八代外港を中心としたウォーターフロント開発などいろんなテーマについて八代のまちづくりに真剣に取り組んでいたできました。

これは、単にアートポリスに参加した博物館のみならず、八代のまちはどうあるべきかについて、八代を愛する各界各層の方々の御意見なり将来への御希望であります。今回の記念誌発刊はそれらを後世に伝えていくよき企画であると思います。

来たるべき二十一世紀に対応する八代のまちづくりは、単に施設をつくるのみならず、歴史や自然と調和した豊かな個性あふれるまちづくりをする必要があります。

そのためには、行政と住民が一体となった取り組みが不可欠であり、それが果たすべき役割を認識し、持てる力を十分に発揮していくことが肝要であります。

今回のまちづくり展は、行政と住民が一体となった粘り強い努力をするそのようなことに皆様が目覚められ、多くの同志の人々が互いに識り合うことができたこと。即ちこのコミュニケーションが今後どのような実を結んでいくのか。

この記念誌発刊を契機としてすばらしい八代のまちづくりができますよう祈念いたしまして御挨拶いたします。

やつしろ型くまもと アートポリス'92



八代まちなみ展事務局長
建設部長
上 田 史 朗

今回、開催いたしましたくまもとアートポリス'92は、本県の地域文化の向上を図り、現代にふさわしい質の高い生活環境を創造して、後世に伝えていく事業で、これらに参加した作品を4年に1回、国の内外に発展しようというものであります。第1回目がことし11月に熊本市を主舞台に開催されました。これは、どちらかというと言葉やまちづくりの専門家向けのイベントです。当市で行われました八代まちなみ展は、その一環として、もっと市民レベルのアートポリスを展開しようと計画し、八代市民の持っている文化、芸術、さらには、将来のまちづくりに対する夢を広く全国に表現しようと開催しました。おかげをもちまして、75団体の参加をいただき、盛会のうちに終了することができました。こうした総合的文化運動は、全国的にも類例を見ない試みであり、各界各層、数多くの皆さんが一丸となって手づくりの「やつしろ型アートポリス」を表現しこれにより、市民はもちろん、このまちなみ展に参加された協力団体の皆様が八代のまちづくりに対する意識の高揚が図られたことやこのまちなみ展を通して地域リーダーが芽生えたことに大きな意義がありました。これからの八代のまちづくりは、行政主導という形ではなく、市民の提案などを頂きながら官民一体となって進めていかなければなりませんし、そういう意味からしても、将来の魅力ある我が八代をみんなで考える絶好の機会であったと考えております。し

たがいまして、今後行政といたしましては、「八代の町は、こういう町なんだぞという情報の発信できるまちなみ」を目指し、アートポリス事業で建設された博物館が点であれば、点から線へ発展できる様、がんばらなければならないと思います。

また、そのことには、まちづくりを引っ張っていくリーダーの育成とソフト面での指導をしていくことが肝要だと思います。

最後に、参加いただきました多くの市民の皆様方を通じまして、地域活性化のために、欠かせない人の輪の拡大に努め、創意と工夫を凝らし、個性を生かした住まいづくり・地域づくりに今後取り組んでいきたいと思います。

肌で感じたまちづくりの熱意



八代市役所建築課課長
永 山 努

アートポリス'92 八代まちなみ展は、おかげさまで、盛会に終了することができました。ご協力戴きました関係各方面の皆様方に対して、重ねてお礼申しあげます。

皆様方のご協力なくしては、このイベントの成功はなかったと言っても過言ではなく、特に、まちづくりにつきましては、今後とも官民協力のもと、推進の必要性を感じるところです。

今回、皆様方の、まちづくりに対する熱意を強く、肌で感じることができ、多くのご意見、提案など数多く戴きました。これらを、施策に反映できるよう、私達も精一杯、頑張っ

てまいりたいと思っています。

このまちなみ展では、私共建築課が、事務局として、職員一同一致団結して一生懸命お手伝いしてまいりましたが、配慮不足などにより、多々ご迷惑があったかと思います。しかし、多くの出会い、昼夜を問わず幾度となく行った、企画の検討、運営、進行など、一緒になり、練り上げ、実行したプロセス……我々にとりましても良い経験になり、大きな収穫になったことは言うまでもないことです。

さて、建築は、申すまでもなく、建物をつくるという観点から、住民の皆様と一緒にになり、快適なまちづくりに貢献できるものと考えています。

ものをつくるというハード面と、昨今見られますよう、人とまちと環境がやさしく調和した生活環境の創造というソフト面の充実も図っているところです。

21世紀に夢を託したタイムカプセルも現実のものとなっているかもしれません。

現在、私達は、公営住宅全団地（23 団地）を総合的に見直す、公営住宅再生マスタープランの策定を行っております。これらにつきましても、地域の特色を考えた、質の高い居住空間の整備を図り、発展性と創意による住まいづくりを、総合的なまちづくりの基礎として考えてまいりたいと思います。

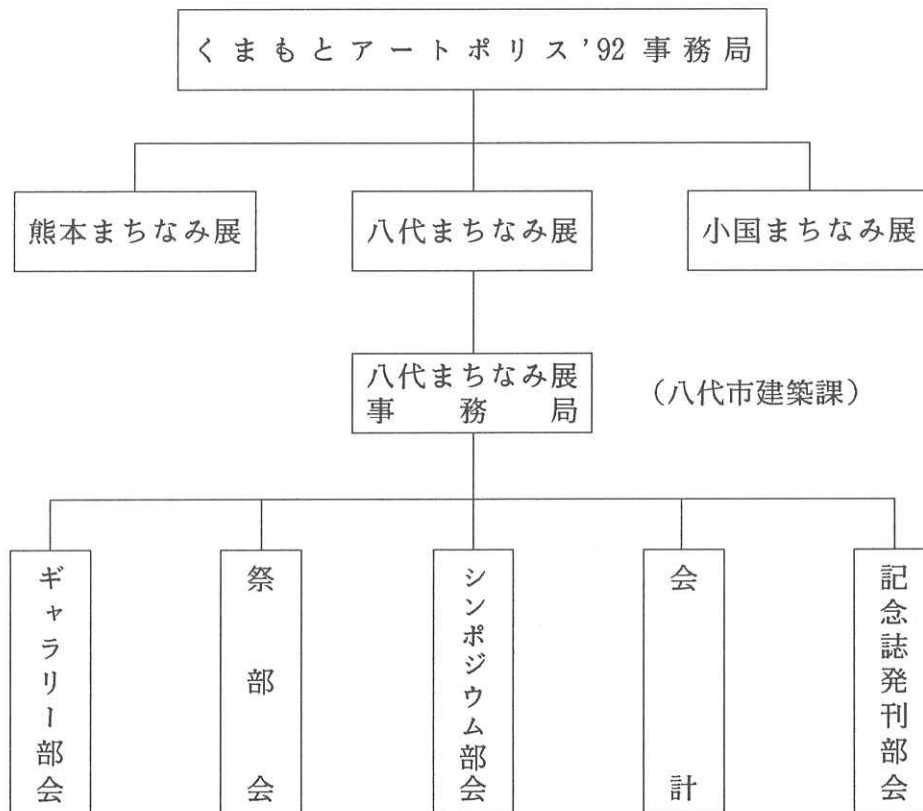
魅力的な、‘みんながすみたいまち、みんながつくるまち’を目指し、皆様と一緒に考え、取り組んでまいりたいと思しますので今後ともご協力をお願い申しあげます。



八代まちなみ展組織表

開催期間

平成4年8月17～23日



参加団体一覧

やっしろまちなみ展の期間中に 市民の皆さんに
こんなアンケートをやってみました。

さて、結果はどうでしょう……

／ 1. あなたの年齢は？

／ 2. あなたのお住まいは？

／ 3. 展示作品の中で興味を持たれたものは？

／ 4. 八代の建築物で好きなものは？

／ 5. 八代のまちなみを変えようとしたら？

／ 6. レジャーランドを作るとしたらどこに？



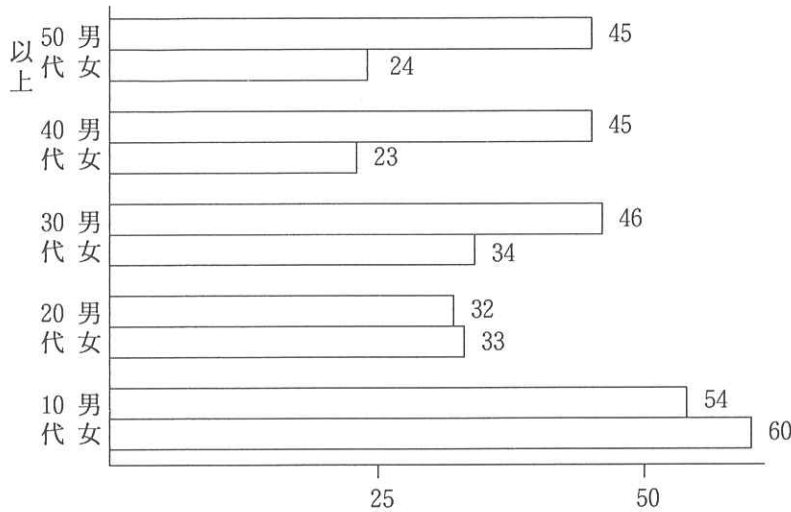
回答総数

男 222 名

女 174 名

計 396 名

1. あなたの年齢は？



2. あなたのお住まいは

市内 265 名

市外 131 名

3. 展示作品の中で
興味を持ったものは？
(複数回答)

模 型	211
絵 画	130
ポスター	82
パ ー ス	83
机・椅子	4
木 彫	3
九 電	1

4. 八代の建物で好きなものは？

・博 物 館	178	・代 陽 小 学 校	1
・松 浜 軒	24	・八 代 七 中	1
・八 代 宮	20	・郵 便 局	1
・図 書 館	14	・N T T	1
・厚 生 会 館	11	・前 川 橋	1
・A C T 6	5	・ア メ ッ ク ス	1
・ア ー ケ ード	3	・ギャラリー	8
・八 代 駅	3	・宮 川 ビ ル	1
・八代東高校舎	3	・服 部 ビ ル	1
・総合体育館	3	・ボーリング場	1
・S A T Y	3	・ツインフラット	1
・通町商店街	2	・ロ ビ ン	1
・弓 道 場	1	・東 船 具	1
・寺 院	1	・アスレチック	1
・カトリック教会	1	・無 し	88
・市 役 所	1		

5. やつしろのまちなみを変えらしたら

萩原町の駅前周辺	90	旭町の中央通り	2	西片町周辺	1
本町のアーケード	85	本町4丁目	2	日置町	1
日奈久	5	八代市全体	1	新町の旧堤防	1
外港	5	本町1丁目	1	大島町全体	1
本町	5	出町	1	植柳上町	1
通町	5	寿屋周辺	1	植柳全域	1
八代城周辺	5	こいこい通り	1	麦島全域	1
日奈久の温泉街一帯	4	厚生会館通り	1	八千把の道路(外灯)	1
大手町	4	北の丸一帯	1	日奈久3号線沿い	1
港町	3	本町全体	1	高田駅	1
迎町(公民館がほしい)	3	塩屋町の古家	1	二見全体	1
田中町	3	本町の道	1	豊原中町稲津家	1
葭牟田町	3	蛇籠旧港	1	本野町	1
本町1～2丁目	2	八幡町	1	道路全般	1
中心部の再開発	2	新開町	1	郡築2番町	1
本町3丁目	2	三楽メルシャン	1	郡築のバス通り	1
通町の国有地	2	新港の港湾施設	1	宮地町の妙見宮	1
古閑上町	2	駅から市内中心まで	1	敷川内ビッグ3号線あたり	1
古閑下町	2	萩原町全体	1	大村町	1
海士江町	2	インターから中心街の通り	1	竜峯山	1
郡築	2	旭中央通り	1	古閑中町	1
敷川内町の山	2	十條の周辺	1		

6. レジャーランドはどこに

第1位 日奈久埋立地		< 少数意見 >	
第2位 外港	●平和町	●坂本	
第3位 港町	●二見	●中北町	
第4位 くま川駅跡	●催合町のBig3号線付近	●レジャーランドは成り立たない	
第5位 郡築	●本町アーケード	●松崎町のたんぼ	
	●植柳の南の方	●高田駅付近	
	●大島	●臨港線沿い	



第一章

部 会 報 告

- | | | |
|------------------------------|---------------------|----|
| 1. ギャラリー部会 | 市 建 築 課 小 橋 孝 男 | 11 |
| 2. 祭 部 会 | 市 建 築 課 羽多野 俊 光 | 12 |
| 3. 祭部会（アートポリス自作を語る） | ア ド バ イ ザ ー 高 瀬 隆三郎 | 13 |
| 4. 祭部会（アートポリス建築家との交流会） | 同 上 | 14 |
| 5. KAP夏休み見学ツアー | 〃 | 15 |
| 6. 時の流れの中に住む町 | 岡 修 作 | 16 |
| 7. まつりを終えて | 設 計 監 理 協 会 前 垣 信 三 | 17 |
| 8. KAP展と博物館 | 八 代 市 博 物 館 澤 田 宗 順 | 18 |
| 9. まちなみ再開発模型引渡し式 | ア ド バ イ ザ ー 高 瀬 隆三郎 | 19 |
| 10. シンポジウム運営を担当して | 熊 本 大 学 伊 藤 重 剛 | 20 |
| 11. シンポジウム部会 | ア ド バ イ ザ ー 高 瀬 隆三郎 | 21 |

第一章

都市ギャラリー回廊展

部会報告

市建築課 小橋 孝 男

この都市ギャラリー回廊展は、くまもとアートポリス'92 八代まちなみ展の三本柱の一つで、あとの二つは、アートポリス祭とシンポジウムである。このギャラリー回廊展は、読んで字のごとく、一つのストーリー性を持たせ、1.4kmにも及ぶギャラリーを、市民の方に歩いてもらおうというものである。

部会の第一回目は、4月3日の本会の設立総会の決定を受け、4月22日6時より市役所31号会議室で行われた。鶴山建設部次長のあいさつのあと、部会長に長藤氏を選出し、議事に入った。まず、各町内の今回のイベントへの取組方を聞き、具体的にどう進めたいかを話し合った。各町内の代表の方の他、



美術関係の先生方、建築設計家たちのアドバイスを聞き、これからの八代のまちづくりを今回のイベントの中でどのように表現したらいいかを協議した。

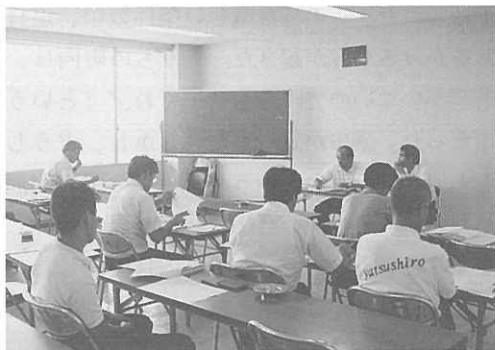
2回目以降は、月2回のペースで会議を行った。今回は、限られた予算、それも一町内30万円以下という苛酷な条件の中で作業が

進められた。この様な厳しい条件の中、追打ちをかける事件が起きた。「うちの町内は、若手がいなくて降ろさせてくれ、」という事だった。議事が難行した。しかし、どうしても成功させたいというスタッフの願いが通じたのか、その次の会議で、事務局が後押しをするということで、その町内は復活した。

開催日が近くなるにつれ、スタッフに疲れと焦りの色が見えてきた。出品用の作品が、中々、仕上がらないのだ。展示会場の方は、なんとか確保できたが、中身がどうも間に合いそうもない。各学校・各町内に電話しても色良い返事が帰ってこない。そんな折、私に永田係長が「心配すんな、間に合うが」の一言。私は、安らぎを覚えた。然うしている内にオープニングを迎えた。初日、市民の方の関心が低い。PR不足がたたっている。

ギャラリー部会の本部を置いた本町二丁目のベスト電器跡で、スタッフでPR不足解消について夜遅くまで協議した。結論として出たのは、今、各会場で行なっている催し物の写真を市民の方に見せようというものだった。

早速、会場案内用の看板づくりが、始まった。終わったのは、夜の何時頃だったか、よく覚えていないが、このイベントに賭けるスタッフの意気込みが感じられた。二日目より各会場とも出足好調となった。が、今度は、台風11号の接近である。二之町に、掲示している大看板が心配である。町内の方と20名ぐらいで、一時撤去である。せっかく、何時間もかけて展示したものが、一から出直しとなった。翌日、台風が過ぎ去ったのを確認して、もう一度、皆んなで展示した。この様に、今回のイベントの日々は、台風11号の様にあわただしく過ぎ去っていった。市民の方と行政とが、共に苦勞し、悩み、努力する。このことこそが、真のまちづくりにつながるものと思う。



祭部会担当事務局として

羽多野 俊 光

8月17日のオープニングを皮切りに、23日まで開催された「くまもとアートポリス'92 八代まちなみ展」は、参加された実行委員の方々と協力団体の熱意と努力により、盛会のうちに幕を閉じました。参加協力してくださった人達に、事務局の一員として、心から感謝いたします。本当にお世話になりました。

さて、祭部会では、第1回目の部会を4月17日に開き、計画書を基に、内容討議してまいりましたが、いろんな問題に突き当たりました。

まず、イベントの最後を飾る「アートポリス祭」の開催場所が、当初の計画では、今後の八代市中心部のまちづくりの核となるよう計画されているJR球磨川駅跡地であったため、会場設営に伴う費用の問題、屋外であるための演出の方法、雨天時の対応、花火打ち上げのこと、そして、中・高生参加の中での乾杯問題など、たくさんの難問がありました。しかし、それも総合体育館への場所の変更ということで、一挙に解決しましたが、一度は、協力をお願いし、了解して下さった関係者の方、球磨川駅跡地周辺の方々には、ご迷惑をおかけいたしました。

また、祭部会には、小部会として、音楽関

係、コンサート関係、料理・模擬店関係とあり、それぞれで会合を重ね、積極的に取り組んでいただきました。

特に音楽関係では、オープニング、パレード、祭、と設計監理協会の前垣氏に、仕事のことを“無理”に忘れて、没頭していただきました。

コンサートは、博物館前の芝生広場で、八商太鼓演奏を、本町緑地では、緑陰コンサートと称して、弦楽器演奏を行いました。少し小雨に降られ、心配されましたが、緑陰コンサートは、NTTの協力により場所をNTTの二階に移して続行されました。このコンサートのことでは、当初、博物館前で、弦楽器の演奏も計画し、警察署で車の騒音が邪魔だから、車を止めて欲しいと、高瀬氏が申し出て、200パーセント無理と言われたこともありましたが、私は、100パーセント無理と思っていましたが。

つぎに、会場に來られた方々をもてなすために計画された郷土料理については、関係者の熱心な検討にもかかわらず、夏場であること、対象人数のことなどで、当初のもくろみが達成できませんでしたが、婦人会のおにぎりサービスと日奈久ちくわ、そして、物産展



で会場を盛り上げていただきました。

模擬店については、どんな方法で、どんな食べ物、どれだけ出すのかと難航しましたが、八代の環境を考える会所属の方々に、“まち

づくりは建物だけではない”と、このイベントの主旨を理解していただき、担当していただきました。

そして、祭のアトラクションに出演していただいた、組曲「球磨川を歌う会」の会員の皆様、2回の合同練習をして、会場を感動に巻き込んだ、300人のブラスバンドの各学校の先生、生徒の皆さん、素晴らしい神秘的な演技を披露してくださった八代ジャズ体操クラブの皆さん、お互いの演奏やビデオを見ながら、打ち合わせを重ね、太鼓と亀蛇の息の合った舞を見せてくれた八代第一高校と出町の亀蛇保存会の皆さん、気合の入った太鼓で、男の意気を感じさせてくれた日奈久温泉六郎太鼓保存会の皆さん、ありがとうございました。

最後に、これだけの多くの人達、団体が、一丸となって参加協力し、このイベントを成し終えたということは、テーマが自分達の住んでいる“まちづくり”にあったからだと言えます。

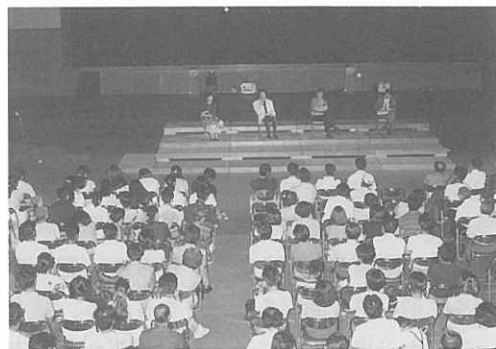
アートポリス祭

『自作を語る』

アドバイザー 高瀬 隆三郎

アートポリス参加の建築家の4人、それも当代人気随一の伊東豊雄氏、妹島和世氏、地元・熊本の桂英昭氏、新納至門氏が登場する『自作を語る』は、アートポリス祭の中でもメイン・イベントのひとつ。全国からのツアー参加者167名が、建築家から直に作品の話を聞けると熱心に耳を傾ければ、会場に集まった市民も見たことのないような「建築」のスライドに目を見張った。司会進行役は、熊本大学講師の桂氏にお願いした。

トップバッターは地元の新納氏。県営帯山A団地の建築設計を公開コンペで見事に獲得。実際に設計を担当し、3月に建物が完成したばかり。新納氏は「限られたスペースだから、建物に凸凹をつけ、小さなオープンスペース



をたくさん住棟の中に作ろうと考えた」と同団地の全体計画を説明。近くに、特異な外観を持つ県営保田窪第1団地があることから、帯山団地も「その雰囲気を引き継ぎ、建物の発する力をより広範囲にとどくようにした」そう。同団地のもうひとつの特徴は、3つの住棟を空中で縦横に貫く「スカイ・ウォーク」。新納氏はその狙いを「団地は住棟ごとに住民が分断されがちだが、この空中廊下で相互連携を強調したかった」と強調した。

「きょう私の話を聞くのは3度目の方もおられると思いますが…」と恐縮しながら語り始めたのは、八代市立博物館の設計者でもある伊東豊雄氏。「この祭では、八代亜紀とデュエットしたかった」と会場を沸かせた後、現在施工中の「下諏訪町博物館・赤彦記念館（長野県）」とベルギーのアントワープ市再開発計画の2つをスライドで紹介した。

下諏訪町は同氏が育った町で、博物館の敷地の前を毎日通学したそう。湖畔という環境から考えたことは「できるだけ単純に」。細長い敷地に船を逆さにしたような細長いアルミ板張りの建物を設計した。

アントワープ市再開発計画はコンペで当選



したもの。埋め立てられた旧ドッグを、再度掘り下げて、「人工的な水の流れが戻り、その水の中に様々な施設がバーコード状に並びながら浮かんでいるイメージ」で計画中と解説。

桂英昭・熊大講師は八代高専で10年間教えていたことがある。同氏はアートポリス参加作品の湯前まんが美術館・公民館を設計。「最初の依頼は土蔵風だったが、敷地に適さないと考え、小さく分けた機能が“群れ”て、微妙な関係を保ちながら大きな建物を構成するように配置した」と言う。さらに、個々の形を木造の高さ制限をカバーするため、郷土玩具のキジ車のようにし、その頭部から室内に光が溢れるように工夫した。「夕陽が沈む頃になると、外装の銀色のガルバニウムに夕陽が当たり、建物の隙間からボンヤリ光が入るようなイメージ」とその概容を説明した。

最後にマイクを受けた妹島和世氏は、実は伊東豊雄事務所の出身者。アートポリスでは民間物件第一号となった再春館製菓レディース・レジデンスの設計を担当した。

妹島氏への依頼は、「女子寮だが、80人が共同生活し研修もできる建物を」だった。そこでテーマを「80人が使うみんなのリビングルーム」と設定。全員でも、またひとりでも快適で、フレキシブルに対応できる場所、みんなの動線になっているし、全体が見渡せる訳ではないがつながっている、そんな場所を用意しようと考えたと、その着想を語った。

4氏によるスライドの後、残されたわずかな時間を使って、桂氏は今回の八代展の重要なキーワードとなった言葉を持ち出した。それは、午後のシンポジウムで伊東氏が指摘した「景観にマッチするということは瓦屋根や木を多く植えたりすることではなく、周辺との新しい関係をつくり出すことだ」という言葉。この“景観との新しい関係をつくり出す”

ことが、アートポリスの建築家に共通した考え方だと強調した。

アートポリス祭・建築家 との『交流会』

高瀬 隆三郎

アートポリス祭の第Ⅰ部が終了した後、第Ⅱ部建築家との「交流会」が始まる前のひととき、ツアー参加者達は第Ⅱ部の初まりを今か今かと待ち望んでいた。

あまりの熱気に「建築家の方々も皆さんと同じフロアに座ります。どうか間近で話したい方は、自分で椅子を前方に自参してください」と呼び掛けたところ、アッという間に4人の建築家を囲んだ扇状の人垣ができてしまった。

第Ⅱ部は司会役を再度、桂氏にお願いし、参加者と建築家が質疑応答する形で進行した。最初の質問は「くまもとアートポリスのような試みが、富山や奈良でもやられている。そうすると、全国みんな金太郎飴みたいに地方性が意識できなくなるのでは」というもの。

これに対し、新納氏は「それはユートピアだ」としながらも、「九州は気象条件が厳しく制約がある土地柄。その中で人間がどう心地良く過ごせるかが私のテーマで、その建築の造形言語がどうかには、あまり興味がない」と、建築家としての姿勢を表明した。

妹島氏は「熊本は日差しも強く、ちょっとした影が心地良い。場所や使い方によって建物をどう創るか考えるのであって、地方だからとは考えられないのではないかと」応じた。

伊東氏は「現代人はどこにしようと、環境を閉じて人工的な環境の中で暮らすようになった。それは恐らく後戻りしない。だとすると

地方による差異性より、建築の持つプリミティブ（源初的）な力を探し出し、地方性を越えたエネルギーを発見する方が、はるかに重要な問題だと思う。ローカリティ（地方性）が地方による差異性の中にあるのではないということが、地方の中から出てくれば、大変面白いと思う」と語り、「地方性と現代」に対する重要な視座を提供した。

この発言を受け、桂氏は「熊本と東京では単価的にも差があるが、アートポリスは自分達が思っていた事を考え直す貴重な機会を与えてくれたことは、熊本にとってラッキーだった」と、この運動の成果の一端を披露した。

次に、参加者から「建築の耐用年数」に対する質問が出た。暗に、伊東氏や妹島氏らの軽やかに見える建築に対し、耐用年数から見た不安感を訴えたかったようだ。

まず、桂氏が「アートポリスを始める時に議論になったが、百年持たせるためには予算を付けなければならない。しかし、その算定の仕方に根拠がない。そこで熊本では1割増しを原則にした」と、アートポリスでの考え方を披露した。

伊東氏は「鉄とガラスの建築だから耐久性がないとは絶対に言えない。残るか残らないかは、（使う側が）残してくれるようなものであり得たら、それを残していった欲しい」と答えた。

桂氏は、昨年の大災害を招いた台風19号を持ち出し、「私も八代市立博物館のガラスは割れると思った。ところがビクともしていなかった。地方にいと、泥でゴテゴテと塗り固めたような建築を造っておけば長持ちするだろうと思いがちだが、材料の吟味の仕方、加工の仕方など、本当に真剣に反省させられた」と、耐用性の問題はいかに真剣に建築と取り組むか、その姿勢にかかっている事を強調した。

この後、伊東氏と妹島氏の師弟関係に対する質問があって時間切れ。桂氏が「くまもとアートポリスでは、それぞれの建築家が純粋な気持ちでプロジェクトに当たってもらった。その成果が今日のような形で表現されてきた。コミッショナーの磯崎新氏と八束はじめ氏には感謝している。おそらく、くまもとアートポリスは世界一です」と結べば、伊東氏も「全国から八代に来ていただいて本当に嬉しかったし、これを支えてくれた八代の皆様、涙が出るくらい嬉しかったです」と言葉を継ぎ、ボランティアの八代のスタッフに大きな拍手を向けた。



K A P 夏休み見学ツアー

高 瀬 隆三郎

「アートポリスというプロジェクトは素晴らしい。特に八代での市民の盛り上りは、建築に携わる人間として感動した。私も参加したい」。「ああいう人達の情熱があれば、必ず新しい町づくりは成功すると思います」。

くまもとアートポリス・夏休み見学ツアーに参加した人達の感想の一部が先の言葉だ。「博物館を機会に、新しい町づくりの輪を広げようではないか」という企画者側の意図は、ツアー参加者の胸にも十分に伝わっていた。

夏休み見学ツアーには、全国から167名が



参加、8月21～23日の3日間、熊本北警察署、保田窪第一団地、再春館レディスレジデンス、三角フェリーターミナル、県立装館古墳館など、いま最もホットな建築を見て回った。

ツアー参加者の狙いは見学にあったし、添乗した県職員にもアートポリスの裏話やエピソードを聞かせてくれとせがんだ。

なかでも目玉は「八代市立博物館」だった。おまけに設計者・伊東豊雄氏の話が直に聞ける。これが一番の魅力だったから、「祭ではもっと建築のことをやって欲しかった」との批判の声がアンケートの中に記されていても無理からぬところだ。

しかし冒頭に紹介したように、ツアー参加者達に「町を愛する気持ちが良く伝わった」（アンケートから）ことも事実で、概ね八代展には厚意的な評価だったと思いたい。

と言うのも、「建築が何かをするのではなく、建築のインパクトで人が何をするか」という意見がアンケートの中にあったが、まさにそのことを表現したのが八代展だった。そして、「（八代に来て）アートポリスのシステム、方向性などがイベントを通して知ることができた」（アンケートから）とすれば、八代展は大成功だったということになる。

逆に八代市民にとっては、全国から人を集め得る「博物館」を、自分達の新しい財産として位置づける貴重な機会となったし、それを起爆剤にこれからの町づくりを進めていこうという方向性も見えてきたと思う。それこそが「八代のアートポリス」＝「八代まちなみ展」だった。

八代展に参加して

－ 時の流れの中に住む町 －

松下電工(株)大阪住環境

岡 修 作

八代名物とか、真夏の熱気の中で、初めて訪れた八代に、見ぬ時のイメージとの差をぶつけながら朝から夜遅くまで各種のイベントに参加した。市の関係者や八代市民のまちなみ展に賭ける熱意と有る種の素朴な手作り感覚が全身汗まみれになりながら感じ取った。イメージの混乱する中で、いきなり伊東豊雄氏の設計になる「未来の森ミュージアム」に遭遇し正直な感じは一種のミスマッチ感を持った。この博物館、作品としての素晴らしさは、有る種の感動を私に与え、大袈裟に言えば最近の建造物の中で環境との取り合わせも含め一番印象にも残る作品で有ることは間違いない。最近大都市圏では短時間で中規模タウンがどんどんと出現している。これらの町は有るコンセプトの下でそれなりの特徴やアイデンティティーを主張しながら出来上がり、ハッピーなファミリーが生活を営んで行く、これらの町はたいていイメージが揃っていて、綺麗であるが画一的な町並みになっていて「現代的」がその持っているもう一つのイメージであろう。

一方、歴史のある町は、そう単純には成り立っていない。時代時代のまちづくりがおこなわれ、その時の時代背景や、人々の生活、有るコンセプトで作られたもの、自然発生的に出来たもの、手入れの行き届いたもの、風化されていったもの、様々な要素の重なりが、雑多に入り乱れていく、その結果、特に我が国のたいていの町はヨーロッパの都市のように時が流れても大きくイメージが変わらないのところがいい、どの町も同じイメージに陥ってしまう。（これも我が国の特徴なのか？）太

陽の輝きと、又、午後の雨の中、案内図にしたがい八代の町を歩いた。南国八代と勝手に思っていたものとの違いが有ったが、やはり地方都市としての共通イメージが有る。その中で今回の「八代まちなみ展」は市民と当局のパワーを感じる。きっと成果が出てくと思う。ここで私なりの気になることを述べてみたい。(どの町でも言えること)

その1 発想の基点や方法論に中央(東京)論理にこだわっていないか。

その2 自都市の特徴にこだわりすぎ、その枠から逃げ出せなくなっていないか。

その3 そこに長く住んでいる人の生活が生き生きする発想が盛り込まれているか。

その4 人々と一緒になり、町の自浄作用で誇れるまちづくりの仕掛けが考えられているか。

八代は東京でも無ければ、大阪、博多でも無い、「八代」だ！／

今回のイベントで行政と市民が一体となって魅力と、誇りのある町づくりが進むことを切に期待したい。

まつりを終えて

祭部会 八代建築設計監理協会
サンシン企画 前垣 信三

8月22日の体育館まつりで閉会のアナウンスを聞いた時、成果はどうであれ無事に役目を果たせた安堵感と、イベント準備の終盤には大いに団結し機運が高まった関係者の熱意で重圧さえ感じた責任から解放された気持ちで、一瞬モノクロ映像の無声空間に自身がいる様な錯覚に陥り、言いようのない虚脱感を感じ

た。しかし次の瞬間、お互いの労をねぎらいながらも手早く後片付けの作業を始めた関係者を見て、このイベントがもたらした別の意味での成功を感じた。

この4月、アートポリス八代まちなみ展の実行委員として参画以来、何度も討議を重ね、



各種団体との交渉に奔走した間も、正直なところアートポリスとそのためのまつりがしっくり結びつかないでいた。職業人として建築以外の事にエネルギーを費しているといった自闘があったのは事実である。果して祭当日にこの成果がどんな形で報われるか不安はあったが、予想以上のツアー参加者や、祭に加わってくれた多数の市民の表情から成功したものと確信している。

祭部会には地域の婦人会や今年発足したばかりのガールスカウトといった所謂建築とはあまり縁のない団体が殆んどである。この参加者達もアートポリスの意味が理解出来ないまま参加されたに違いない。芸術的な都市空間を建物が創造するとすれば、そこに存在する市民の芸術に対する感受性が大きな意味をもつ事になると思う。こうして郷土料理の伝統を守り、球磨川の自然を歌い、小鞆節の旋律を育む事こそソフト面でのアートポリスと言えるのかも知れない。又、この祭の成果の一つとして特筆すべきは出町の亀蛇保存会の乱舞と八代第一高校の八商太鼓の共演である。伝統芸能に現代の若者が奏でるコントラスト



があるいは次の世代に新しい伝統を創り出すかも知れない予感がした。又、周囲が体育館のメイン行事に注目するなか、本町緑地で行なわれたコンサートにも参加者の努力に敬意を表したい。永い間地道に活動が続けているギターアンサンブル同好会の面々、八代に大都市にあるような本格的な交響楽団を造るため代表の野口洋子氏は私財を払ってまで努力される姿に心から声援を送りたい。街の一角で企画された演奏会も今後に大きな波紋を投じた先駆けでもあり、公園の利用にも新鮮さを発見出来た事と思う。都市に緑があるように、人の心の緑はやはり音楽であり絵画である。人と物とが一体となり造る街、それこそアートポリスの真の姿である。300人の大合奏の成功も、その他の予期せぬ成果についても全ては参加してくれた団体各位の惜しみない協力のたまものであり、祭の企画をされた事務局の御苦労と構成を根底より支援してくれた建設業関連団体の熱意に感謝する次第である。

八代市立博物館

未来の森ミュージアム

ー八代まちなみ展に参加してー

澤 田 宗 順

八代市立博物館未来の森ミュージアムは、八代市教育文化センター建設事業の一環として計画され、くまもとアートポリス'92市町村第1号参加作品として建設された。平成3年3月竣工、同年10月25日に会館した。

会館前から建築界の注目を集め、建築関係者をはじめ、行政担当者など各界の見学が相次いだ。また建築雑誌・広報誌などでも特集され、アートポリスに参加したことによる多

大なPR効果があったようである。

建物竣工後半年間、市民には待望の施設がオープン、今年8月の「くまもとアートポリス'92八代まちなみ展」開催までに約54,000人の入館者があった。来館者は、地元八代はもとより、県内外、遠くはアメリカ、ドイツなど外国からも多かった。

今回八代まちなみ展では、メイン施設の博物館を中心にいろいろな企画が組まれた。

博物館では、八代まちなみ展開催に先立ち、8月11日(火)から24日(月)までの約2週間、本館特別展示室を利用し、博物館とくまもとアートポリス'92実行委員会の共催による「くまもとアートポリス展」を開催した。八代唯一のアートポリス参加作品である博物館を見学しながら、その他の参加作品を写真と模型で一覧することができ好評を博したようである。この展示期間中の入館者数は約2,300人であった。

八代まちなみ展開催中には、博物館前面に広がる芝生の上で、オープニングセレモニーやミニコンサートが催された。

オープニングセレモニーでは、青空のもと、「開会宣言」「まちなみ・建物、写生・写真コンクール表彰式」が行われた。ミニコンサートでは、第一高校太鼓部による和太鼓の演奏が行われた。

観客席はなだらかに盛られた人工の芝の丘の上、眼下の前庭部で繰り広げられる催しものを楽しむことができる。これは設計段階から、設計者が意図して、その利用を考えていたものであるが、このように楽器を用いたコンサートははじめての試みであった。

ただ、残念であったのは、前面の八代港線の交通量が多く、騒音によって演奏の音が掻き消されたことであった。今後、臨港線の完成によって八代港線の交通量が少なくなれば、いろいろな催しものも可能となるのではと思

われる。

今回の事業は、設計段階から博物館建設計画に携わり、また、これからの運営にたずさわっていく者として、郷土八代にすばらしい博物館がつくられたことを、改めて実感させるものであった。



模型引き渡し式

高瀬 隆三郎

八代展を盛り上げた大きな柱のひとつは、八代高専の学生たちによる「本町2丁目」「八代駅前」「日奈久」の活性化計画。特に模型は、八代市民に自分達の町を見直す絶好の機会を与えた。

模型を作りっ放しにしたい、図面や模型に込められた学生達の提案を、キチンと町の人達に投げかけ、これからの町づくりに役立ててもらおうと、「模型引き渡し式」を9月19日、八代高専の一室で行った。

出席したのは学校側から治部先生、黒瀬先生ら5名、学生が13名、町内から本町2丁目が大岡氏ら3名、駅前飯田氏、日奈久が田村氏ら4名、さらにアドバイザーとして、学校側と町内のパイプ役を果たしていただいた八代建築設計監理協会の長藤氏、下野氏ら7名、市役所から井本氏、永田氏ら4名がそれ

ぞれ出席。司会を高瀬が担当した。

引き渡し式では、八代市建築課の井本係長と設監協会の長藤氏が「皆様のおかげで、八代展は大成功でした」と学校側に謝意を述べた。また工専の治部先生も学生達に「よくやってくれた」とその頑張りを称えた。そして町内および学生達の自己紹介の後、学生達が担当グループ毎に自分達の案を図面や模型を示しながら解説、町内の人達と意見交換した。

まず日奈久。種田山頭火の「温泉はよい ほんとうによい ここは山もよし 海もよし」という句を題材に、既存町並みには最小限に手しか加えず、湯、山、海の良さを引き出し3者を回遊させた案と、海側に若者向けの海洋リゾート基地を設け、町のメイン・ストリートにおみやげ物店や飲食店をコンパクトにまとめた案の2案を担当した学生達が説明。町の人達から「前者は現実的で参考になる提案で、感心している」「後者は、天草を含めた海洋レジャー基地としての日奈久を考える良い機会になった」と両案を高く評価した。

八代駅前案は2案のうち、片方の担当者が欠席で片案だけが説明。「殺伐とした駅周辺を明るくするため、水と緑と音のある公園や



若者向けの屋台村など設け、3号線は地下に潜せた」と趣旨を話した。駅前代表の飯田氏は「3号線の辺りは高低差があり、地下に潜らせると交通がスムーズになる。球磨川を意識したりリバーサイド計画もいい」と評価し



た。本町2丁目案は、アーケードの改修型と撤去型の対照的な2案があり、八代展の会期中も注目を集めた。改修型は「長くて新鮮さを感じないアーケードを2分し、切れ目にイベント広場と核施設を配置し、人々が楽しめるように工夫した」(担当者)のが特長。町側からも「イベント広場として位置づけられている大洋跡地は、町としても重要な空間と考えている」との発言があった。

後者の撤去型は、アーケードの代わりに町の各所に遠くからでも見えるシンボルタワーを設け、かつ、店舗間の壁の一部を取り払い、お客さんが自由に店の間を回遊できるようにしたのが特長。これに対し「オブジェ風のタワーは面白い」「本町通りには建物をセットバックする計画があるが、店舗間の壁を除くならそれも不要になるのでは」などの声が上がった。

最後に、各町内でも町の人達を集めて意見交換会を開き、今後の町づくりの叩き台にしたい旨の意志表示があり、模型は各町内の人達の手でそれぞれの町へ運ばれて行った。

シンポジウムの運営を担当して

熊本大学
伊藤 重 剛

シンポジウムの最初の打合せに八代市役所に県庁建築課の田上さんと出掛けたのは、シンポジウム当日から1か月ほど前のことであつたろうか。私はシンポジウムの方の主催者である建築学会の歴史意匠委員会の担当者として、運営を任されている立場にあつた。しかしながら7月前半の外国出張とその前後の用事やらで、実際の仕事にあまり時間が割けず、実務についてはほとんど歴史意匠委員会

のメンバーでもあり八代市の教育委員会に勤務している原田さんに、ほとんどお願いしている状態であつた。そのために正直言って、準備の遅れに少々あせりを感じていたのであつた。

ところが八代市役所に行って土木部長、建築課長、係長さんをはじめとして、それぞれの担当の皆さんにお会いして、私の心配は全て杞憂であることを感じた。皆さん全てヤルキ満々で、とにかく若いスタッフの人々の熱気には並々ならぬものを感じた。そしてその日のうちに、シンポジウムに関わる学会側の全ての事務的な手筈をすみやかに整えることが出来たのであつた。直接の打合せはこれがほとんど最初で最後であり、あとは原田さんと電話連絡だけでのやりとりであつた。しかしながら、全ての運営はうまくいき、建築学会の事務局としては感謝感激といったところであつた。ちなみに建築学会がこの行事に出したのは10万円、八代まちなみ展実行委員会が出したお金は数百万円。私は今八代の方へ足を向けて寝られないのである。

ここ2、3年はともかく、この十数年ほどは私の周囲で聞く八代に関する話題というのは、マイナスなイメージのものがほとんどであつた。ヤルキがない、沈滞ムード、企業におんぶに抱っここの体質、などといったことばかりであつた。私ごとながら、私は小学校の低学年だった昭和33、4年ごろ八代の通町に住んだことがある。その頃の八代は高度成長の波に乗った工場の御陰で、通町はもちろん町全体が実に活気に満ちていた。その後の景気の落ち込みなどで、八代も次第に活気を失っていったが、好景気のころの体質がそのまま存続し、町としては特に何もせずにあるいは何もできずに今日に到ったのが実情のようであつた。

こういった低調ムードのときには、何か外

からの刺激を導入するに限る。八代がにわか
に注目を浴びようになったのが、博物館の
建設が決まってからであった。しかも熊本ア
ートポリスの事業として設計は今日の設計界
でもっとも先端的な仕事をしている伊東豊雄
氏で、その斬新なデザインは設計の段階から
雑誌などで話題になっていた。建設後も、八
代の博物館はアートポリス事業で最も注目さ
れる建築作品となっており見学者が引きも切
らないが、それだけにとどまっていなは、
博物館が町づくりに対する周辺の市民とその
町づくりに多大の好影響を与えていることだ
である。今度のシンポジウムを含む八代での一
連の事業が、市民あげての大仕事となり大成
功に終わったこともその証明である。これこ
そ建築のもつ力といわずに何であろう。「元
気の出るテレビ」という番組があるが、「元
気の出る建築」もあるのである。人は他人か
ら褒められ認められると喜ぶし、自信を得る
ことができる。八代はいま自信を取戻しつつ
ある。

シンポジウム

『八代城と博物館からのまちづくり』

主催：(株)日本建築学会九州支部歴史意匠委員会
くまもとアートポリス'92八代まちなみ
展実行委員会

高 瀬 隆三郎

8月22日午後1時半、ホワイトパレス出雲
の玄関先に展示された八代妙見祭の名物・出
町の亀蛇(きだ、通称ガメ)の偉容に眼を見
はりながら、学会関係者や全国からのアート
ポリス・ツアー参加者達は会場に入り、市民
も交えたシンポジウムは始まった。

まず、主催者側から前川道郎・学会歴史意

匠委員長があいさつ。続いて、八代まちなみ
展実行委員会会長でもある沖田嘉典市長が
「21世紀の八代のまちづくり」と題し講演。
古代史からひもとき、21世紀に向けたバラン
スのとれた町づくりへの抱負を語った。

“歴史的建築と新しいまちづくり”をテーマ
に基調講演した西和夫神奈川大学教授は「八
代城は古く、博物館は新しい、両者は別だとい
うのではなく、まちづくりでは両方は同じ
意味を持つ。残すこととつくることを同じと
考え、まちづくりに積極的に生かしていくこ
とだ」と指摘した。



パネル・ディスカッションには、博物館設
計者の伊東豊雄氏、近世城郭の研究者で八代
にも詳しい北野隆熊本大学工学部教授と共に、
地元から八代いしん青年隊隊長の橋本和久氏、
主婦の寺本絹子さんがパネラーとして参加し
た。アドバイザーとして西教授、司会進行は
熊大工学部の両角光男教授が行った。

まず、両角氏が「工業都市八代は一時元氣
をなくしていたが、久し振りに来て見ると活
氣が出ている。博物館や八代城がまちづくりに
どのようなインパクトを与えているのか」と
地元パネラーに水を向けた。

これに対し、保母をしていた寺本さんは当
時を振り返りながら、「博物館の所は以前、
公園だった。そこに子供達をよく連れて行っ
たし、子供達もそこを“森の公園”と呼んで
いた。漸新な建築にビックリしたが、大きな



木は残されてホッとした。ただ、松浜軒やお城といった環境にマッチするかなと思った」と、博物館への正直な感想を述べた。

また、橋本氏は城の堀を埋めたり、松井家の能舞台が他市に移築されるのを行政、市民ともに座視して来た過去への反省を込めて、「空に羽ばたく鳥のような素晴らしい建築ができたのを機会に、自分の子供達が自分達の町を誇りに思うようなまちづくりに取り組んで行こう。旧町名を復活運動を展開するのもその行動のひとつではないか」と強調した。

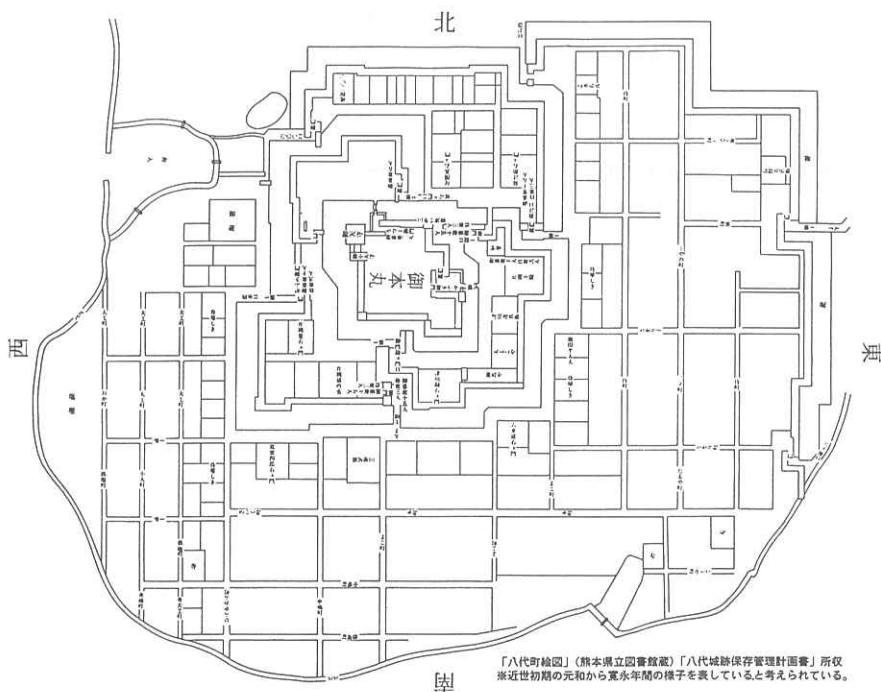
博物館を設計した伊東氏は「松浜軒などの周辺環境に調和させるとなると、瓦屋根を載せなければならないのかと随分悩んだ。3ヵ月後に第一次案を持ち込んだ時は、切りこみでもするような悲壮な覚悟で来た。保存と同じくらいに新しいモノをつくる時には覚悟がいる。博物館では、周辺環境との関係をどうつくり出すか、その責任を取ろうと考えた。

松浜軒は博物館の十分の一の規模しかない。そこでスケールやプロポーションを熟考し、築山を設けるなどの規模の落差を解消しようと努めた」と、博物館の発想の原点を語った。

北野氏は「八代には江戸期の八代城、明治期の聖パウロ記念館、大正期の植柳小学校、昭和期の厚生会館（芦原義信氏設計）、そして平成の博物館がある。歴史的な重層感のあるまちづくりができる」と可能性を示唆。

また伊東氏も、「小さな公園が整備され、町はきれいになっているのに、町の中を人が歩いていない。他から来てもこの町の歴史性等が透して見えるような、点を線へとつなげるような戦略的な空間づくりができるのではないか」と、今後のまちづくりにアドバイスした。

このあと、会場の参加者との質疑応答を行い、建築とまちづくりを再考する有意義なひとときを終えた。



「八代町絵図」（熊本県立図書館蔵）「八代城跡保存管理計画書」所収
※近世初期の元和から寛永年間の様子を表していると考えられている。

第 二 章

八代まちなみ展に参加して

1. 私達の役割・シンポジウムに参加して	主婦 寺 本 絹 子	25
2. 婦人会の地域づくり	八代市地域婦人会 沖 川 田 鶴 子	26
3. あたたかいまちづくりに期待	八代市料理連合協議会 三 渕 周	26
4. 町を見ての議論も	国際ソロプチミスト八代 岡 本 和 子	27
5. 八商太鼓の熱演に感激	出町亀蛇保存会 岡 本 武 志	28
6. 模擬店を担当して	八代の環境を考える会 長 尾 テイ子	29
7. 少年が見た芸術都市八代の未来	九州電力課長 藤 井 守	30
8. オープニングセレモニーに出て	ボーイスカウト・八代二中 森 本 昌 樹	31
9. イベントへの参加が奉仕の心をみがく ..	ボーイスカウト・熊本大学 井 山 裕 文	32
10. 懸命に練習し、堂々の行進	ガールスカウト・主婦 白 井 清 美	32
11. 「こたい」は100点だったな	ガールスカウト・八千把小 綿 島 睦 実	33
12. 山頭火と日奈久活性化計画を通して	八代高専 今 村 正 則 他	34
13. 何回も書き直した八代駅前計画	八代高専 下 田 孝 年 他	35
14. 作品見学者を見て喜びを知る	八代高専 渕 上 卓 広 他	35
15. 〆切10日に涙と汗	八代高専 松 島 剛 嗣 他	37
16. 苦労した模型づくり	八代高専 坂 本 昭 信 他	37
17. ギリギリにやる気	八代高専 米 沢 弘 樹 他	38
18. ポスターは博物館から七色の虹	八代工業高校 野 田 真由美	39
19. 「ついで」の催を恒例に	八代ギターアンサンブル 竹 原 俊 次	40
20. アートイン通町ミュージアムストリート八代 ...	通町商店街振興組合 山 川 敏 光	40
21. 歴史と調和するまち	九州共立大学工学部教授 尾 道 建 二	41

第二章

八代まちなみ展に参加して

私達の役割・シンポ

ジウムに参加して

主婦 寺本 絹子

今回「アートポリス八代まちなみ展」という大きな催しに参加させていただいたことによって、私自身が大へん貴重な経験をしたことは勿論のことですが、私の周囲の人々・御近所の方や友人・かつての園児からも反響がありました。「アートポリスって何？」という質問も多く受けました。

「主婦の立場としての意見を」との依頼で軽くパネラーを引き受けてしまった私は、シンポジウムを終えて自分の発想の乏しさ・勉強不足を実感しています。

北野教授が「八代には時代を代表する歴史的遺産が残されている。もっと目を向けよう新しい建造物に関しては〇〇風のものではなく今の時代の個性を持つ建物を残していくことに意義がある。」と発表されたこと。伊東氏が「博物館を建築することによって眠っている様に見える八代の街を活性化し、古い歴史と新しいものとの調和を図っていくきっかけにしたかった。」と発表されたこと。西教授が「良いものは自然に残るものではない。意識して残そう」と発表されたこと。橋本氏が青年として八代づくりに熱意を燃やしておられること。これらの発表を思い起こすたびにアートポリスの意義深さを感じています。

これまで公共の建造物を観る時、機能面が重視され、外観やデザインは軽視されがちだっ

たようです。しかし、こうしてアートポリスの建造物が県内各地に賑やかに現れると、その環境に及ぼす影響の大きさには驚かされます。環境デザインを刺激すると同時に地域の人々の生活観をも変えようとしています。

今回の八代での成功の陰には地域の人々が博物館に込める希望や願いがあり、催しを支



えてくださった建築家の方々の努力・ボランティアの皆さんの温かい協力がありました。この市民の熱意こそが「これからの八代づくり」の原動力となっていくことでしょう。

「誰かがやってくれるだろう」「今のまゝでも困らない」という地点から一歩出て、いろいろな催しに参加していきましょう。公共施設や各団体が発信している情報に耳を傾けましょう。自分達の住む八代をもっと豊かにしていこうとする気持ちがあれば、誰にでもできることがあります。子どもからお年寄りまでその持ち味を生かした役割があります。情報を提供する人・実動する人・援助する人が一緒になって作り上げていくことは、本来人の持つ喜びでもあります。育ちゆく子ども達に本物を与えてやりたい、たくさんの感動に出会って欲しいと思います。私達は先人から多くの文化遺産を引き継ぎました。さらに現代の創造物を付け加えて次の世代に残していくのは今を生きる私達の役割です。



婦人会の地域づくり

八代市地域婦人会
会長 沖川 田鶴子

じっとして居ても汗ばむ八月十七日、八代の新しいシンボル 未来の森ミュージアム博物館、松浜軒、図書館、八代城跡、歴史と文化、美術のゾーンの中でのオープニングセレモニー、高らかに響くファンファーレ、開会宣言、まちなみ展の成功を願い目的を一つにした関係者、みんなの半年に及ぶ御苦勞が去来し、喜びと感動でジーンと胸熱くなり感激の涙、こぼれない様空見上げれば、真夏の太陽キラキラ焼付く様、この喜び、感動私一人ではなかったろう……一人ひとりが心を寄せ合い、お互の思いやりの気持、知恵を出し合い努力し、連帯感がまちなみ展を盛り上げ成功に導びいたものと思う、一つになる気持こそ明日への新しい展望を開く原動力になる事を知る。まちなみ展に参加して感じたまま……

婦人会の未来の八代まちなみ像は、住みよい緑と水のうおう環境づくり、豊かな温も



りのある家庭づくり、将来を囑望される青少年育成、常に夢は大きくもち、歴史と文化の息づく街づくりをめざす。

婦人会に課せられた問題はたくさんありますが、婦人会は地域づくりを目標に時代に即応した新しい活動を続けてまいります。

あたたかいまちづくりに期待

八代市料理連合協議会
三 瀧 周

“K. A. P”くまもとアートポリス訳すると“藝術的な街”という事だそうです。前県知事細川護熙様の県政の企画の中で当市博物館（未来の森ミュージアム）が出来、舌をかむような名稱で私も時代におくれたなあとと思ったのが正直なところです。

そして此の度の“くまもとアートポリス ’92 八代まちなみ展”の実行委員にすいせんされたとき自分の立場、能力をかえりみずお引き受けし何故か積極的に取りくみましたがこれは私のどこかにそうさせた何かがあったようです。

もう40年近くもたとうとしていますが、かやぶきの古い家と森と能舞台のある広いお屋敷の一角に暮らしていたのがあの場所なのです。広い道路が出来、裁判所、厚生会館が建てられ、能舞台は水前寺公園に移築、そのあと地はゲートボールや子供の遊び場となり何となくさびしい感じでした。道路の北側の広場は一中のバレーコートになり、図書館になり、松井神社、八代宮と周辺がきれいに整えられました。

主人は博物館と八代文化の殿堂として建設することを市政にたずさわる最後の仕事として県および市政に協力して参りました。いろんな見方、考え方があるかと思いますが、私には私なりの気持が“K. A. P”祭りに参加させたのだと思います。

役割り分担の中で最初は料理連合会の代表としての立場で郷土料理とか、八代の産物とかを考え私の発想を提案したのですが取り入れられませんでした。船やかっぱの氷彫刻に魚の小切りを盛ったり、桶そうめんを日奈久

のはしで、おにぎり、日奈久ちくわ、船出浮きのいかめしと“アートポリス”にそった構想だと思ったのですがただ大きな夢を見ただけになりました。

期日が迫るにつれて内容も具体化し、婦人会の沖川さん、国際ソロプチミスト八代の岡本さん、建築課の羽多野さんと四人の話し合いも度々でした。最終的には、岡本さんとシンポジウムの方に参加し松浜軒における昼食の接待に絞って、わずか一時間の割り当てられた時間に大きな夢を縮小しました。

国際ソロプチミスト八代の会員の方々の裏千家の抹茶と、350年来松井家に伝承されてきた“孤雲餅”の作成を考え心をこめて作りました。“味の嵯峨”さんの協力によるお弁当、古い歴史と新しい文化とを織りなして皆様にいくらかの感動を覚えていただけたらと思います。ひんやりしたのど越しのよいくず餅と、日奈久の上野焼きの抹茶茶碗にたっぷりのお茶で暑さや、つかれをいやしていただけたでしょうか。

午後はシンポジウムに参加させていただき、世界的なレベルの建築家伊東先生のお話もお聞きし、夜は女性の建築家の活動にもふれさせていただき私の視野と教養が広がり深まったことを感謝します。建築業会の人達と接することが出来街づくりの中で仲間づくりも出来たと思います。今後は都市計画の中で地域の特徴を生かしながら、歩いてみたい、眺めてみたいあたゝかい町、人づくりをやって下さい。



町を見ての議論も

国際ソロプチミスト八代
代表 岡本和子

大変厳しい盛夏の日でしたが、八代市民も含めて、多数の参加者があり、パワー溢れるシンポジウムでした。八代市民の中には、真剣に町づくりを考える人が、多数いる事実を確信しました。

神奈川大学西教授の基調講演には大変感動し参考になる部分が多々ありました。パネルディスカッションの中でやはり八代の町づくりにつながるものがなかなか見出せない様でした。パネラーの発言の中で旧町名が消えていく事により、八代の城下町としての町名が、時代の近代化と共に意義がなくなることは、推移の流れに逆らえない事なのだろうかと言っておられましたが、私個人としては、町名のみにでも、歴史的背景を感じさせる重要性はある様に思います。

観光地資源としては、やはり西教授の講演にも、ありました通り、歴史的建築物を完全保存し、その建築物及び史蹟地と新しい建築物とのつながりを持つ町づくりが必要ではないかと思います。

又有休地の再開発利用と活性化が早急に実現出来る事が、今一番の重要課題だと思います。例えば今回の見学コースの中に旧球磨川駅跡地とその周辺の町づくりとの関係、本町四丁目と博物館周辺迄の町づくり、八代駅前周辺～野上～アーケード街迄の町づくり等を専門の先生方や学生の皆様に、八代の町づくりをテーマとして見学して頂き、シンポジウム会場で発言の場を設けて意見発表して頂いたら一体感があつたのではなかったでしょうか。

八代の町づくりに他所から来訪の学生諸君



には、話題に出る場所や建物が、どういう立地条件及び環境条件なのか、実情把握が出来ずただ聞かされるだけに終わったのではないのでしょうか。又歴史的建築物等の保存と申しましたが、今回松浜軒の御中食を担当して感じました点の一つ、先般の颱風で、建物及び瓦の損傷がひどかったのですが、県の文化財指定を受けている為、平成五年度の修復という現実がありました。特殊建築の為、早急の修復は不可能にしても、観光重視の面から言えば早急な補修が必要ではないのか、県か市の臨機応変な対応の検討も必要ではないかと思っています。

八代では今迄にこの様なシンポジウムは対象外の感がありましたが、今回は八代市立博物館の建造により指定地域に決定された事は今後、熊本県第二の拠点都市としての発展に国内は勿論、国外にも強いインパクトを与えたことと思います。

唯一欲を言えば、八代らしい郷土料理（食の文化）も今後、研究し掘り起こしていく必要はあると思います。球磨川や竜峰山、古麓山麓等の川魚料理と柑橘類を中心のレジャー等、万葉の里としての水島周辺の文学散策コース等、地の利を考慮した史蹟廻り及び郷土民芸の体験実習（竹細工、高田焼、宮地の和紙）等若者が来てくれる八代の町づくりに多いに期待致します。

八商太鼓の熱演に感激

出町亀蛇保存会

会長 岡本 武志

八代市に全国的にもめずらしい芸術的な博物館が出来た事により建築界で世界的に有名となり、今回八代市で、'92 熊本アートポリ

ス八代まちなみ展が開催される事になった様です。大会を盛り上げるため私達出町亀蛇保存会に市役所を通じ出演の依頼があり、協議の結果協力する事になったのです。

しかし、祭とちがいイベント出演の場合、約50名の人を集めるのが大変でした。この行事の意義を理解して、保存会の皆様にも気持ち良く協力していただきまして出演する事が出来ました。

ただ、私達の亀蛇は祭では人気者かもしれませんが、イベント等ショーには合わないのではないかと反省しております。祭りは観衆と亀蛇とが一体となって盛上がりがあるのですが、音響も何もない亀蛇の場合、ショー的なものでは観衆をわかせる事が大変むずかしいのです。重さ130kgを四人で担ぐため動きも限られてしまいます。

今回八商太鼓をバックに演舞したのですが、即興のため、うまくいかなかった様に思うのです。外部のお客様には珍しさもあり目移りは良かったでしょう。しかし、八代で祭を知っておられる方には物たりなく感じられた事で



しょう。八商太鼓の皆様は一生懸命に叩いてもらい大変感動いたしました。今後も八代市のためになるイベントへの依頼もあると思われるのでショー的な事にも出演出来る様に研究していくつもりです。

今回のアートポリスでは、出町にとっては直接関係のない様な気もするのですが、レイ

ンボー計画の球磨川駅跡地の開発には大いに期待するものがあるのです。出町の商店街は道路拡張により寸断され、六つの区域に分けられてしまい今や商店街と言う形体がなく角々に店があると言う具合で、まとまりのないものになってしまったのです。この際、レインボー計画と合せて出町一帯の再開発を期待するものです。

元々出町は八代市の出入口の街として昔は大変活気のある町だったのですが、今では、その面影もありません。レインボー計画の中で中心部との橋わたしの町として今のままでは淋しいものを感じます。ぜひ行政の側でも出町の商店街に活力を与えるアイデアを提供していただきたいものです。又、出町には全国的にも有名な彦一とんち話の「彦一」が存在したと言う証拠となる過去帳が光徳寺に残っているのです。

妙見祭への奉納の「亀蛇」(ガメ)も全国的にもめずらしく色んな所からの問い合わせがあるのです。これらの組合せで八代の観光の一つにしたらどうでしょうか。出町の光徳寺も今年から二ヶ年をかけ200年ぶりの大改修をする事になっているのです。この様に古い町には現代にない良さがあると思います。今のうちに全てを掘り越し21世紀を担う若者のために悔いを残さない様に、我々出町に住む者として考えているところです。

模擬店を担当して

八代の環境を考える会

事務局 長 尾 テイ子

はじめに、八代まちなみ展に参加できたことを深く感謝致します。私たち「八代の環境を考える会」は、多くの人達と環境のこ

とについて共に考える事が出来る機会があることを大切にしています。その点からも今回の参加は私たちにとって有意義なものとなりました。

市から模擬店の担当として参加して欲しいとの呼びかけに、私たちとしてはどのような姿勢で参加するのが一番いいのか事務局での会議を数回開き昨年の「'91 環境フェスタ in 八代」の経験を生かし参加することにしました。

会議の中で話し合ったことは模擬店の中にも自分たちの目的としていることを貫くこと、又同時に何らかの形で運動の目的を表現する



ことが出来ることが事務局の一致した意見でした。幸い市でも私たちの思いをご理解頂き、「環境」に関するパネルを八代サティさんの協力を得てロビーに展示して多くの人たちに見て頂くことが出来ました。残念なことに人手が少なく展示場に人を配置してパネルの説明や参加者との意見交換などが出来なかったことを反省しています。

今回、模擬店をしたのは「八代の環境を考える会」の中の七団体とボーイスカウト、ガールスカウトのみなさんと、それぞれが何を出すか工夫して頑張りました。

参加団体は次の通りです。

コープ熊本 …………… やきとり

球磨川さなぼり会 …… こいこく

環境フォーラム ……… うどん



八代子ども劇場 ………	カレー
カッパ共和国 ………	おしる粉
八代漁業協同組合 ……	手づくり石けん
グリーンコープ八代 …	フライドポテト ジュース アメリカンホットドッグ
ボーイ・スカウト	} かき氷
ガール・スカウト	
	アイスコーヒー

当日は、テント、電気配線、水まわりも配慮していただき、それほど混乱もなく模擬店を運営することが出来ました。注意したことは、各団体とも使い捨ての食器や箸を使わないこと、ゴミを出来るだけ出さない努力をすることでした。夏の夕べの一刻を多くの人たちに楽しんでいただけたと思います。

私たちはこれからもこのような企画や機会があれば参加していきたいと考えています。これからのまちづくりは、まちなみを整えて美しくすると共に、そこに暮らす人々が健康で心豊かに生きていくことが守らなければならないと思います。ふるさとの森や河川を大切にしたり、日々の暮らしの中でゴミを減らす努力など、今回の行政と市民との出会いで共に考えていくことのできる第一歩であればと願っています。

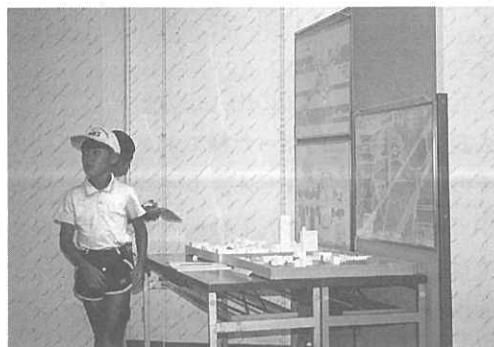
少年が見た芸術都市八代の未来 ー八代まちなみ展に参加してー

九州電力
課長 藤井 守

「オジサン 八代駅は何階建てなの？ 電車のホームは2階でしょ！」

八代駅前開発模型を指さしながら、カン高い声をあげ、ランランとした眼を上に向け一所懸命に質問をしているのは小学校に入ったばかり位の男の子であった。アートポリス 92'

八代まちなみ展も終りに近づいた土曜日の夜市での出来ごとである。平日は見学者も少なく手もちぶさたの日が多かったなか、この夜ばかりは大人も子供も、どっと流れ込み、対応者も、あまりの人数に唖然としていた。とにかく子供が多いので、せっかく入念に作っ



てある模型が壊されないようにと用心のため、作品の横に居たが、この少年の好奇心のかたまりは奇声を発しながら、すでに手は作品に触れていた。

「君が、おじさん位の年になったとき、八代市はこのように、素晴らしい駅と、駅前の街なみになっているよ」

「本当!! スバラシイ」

大人のような返事をしたと思うと走って外へ出ていった。二十分くらい後に、この少年は父母と姉をつれて来てこの作品の前に立っていた。得意そうに駅前模型を説明している。たぶん、私が言ったことと、自分の夢を加えて未来の八代の話をしているのであろう。

「アッ、姉ちゃん、さわっては駄目だよ、ここに書いてあるでしょ、作品には絶対にさわらないで下さい、とネ!!」

思わず苦笑した。少年が作品にさわった時注意したことをそのまま言っているではないか。

私が小学校六年の時戦争が終り、住む家も満足にないとき、唯一の楽しみは、友人の輪の中で眼をかがやかして読んだ手塚治虫作の

マンガ本であった。未来の建物、ロケット、原子力の素晴らしさ、このような時代がくるとはとても思えなかった。“夢”まさに むねおどらせる夢でしかなかった。ところが、どうであろう、絵の中に描かれていたテレビはすでにわが家においてあり、数十階建てのビルもぞくぞくと建築されている。ビルからビルの空間を道路が通り、車が往来しているマンガ絵が現実となっているではないか、手塚治虫氏の将来をえがいた文明都市“アートポリス”先生の眼のするどかったことに敬服するとともに、今、少年が夢のようなことだと思っていることが、やがて現実となってくるであろう。

建築芸術都市アートポリス八代市、このアートポリス計画も、少年達の夢をのせて出発した。素晴らしい建築物、地下や空間を利用した高層ビル、やがて高架を走るモノレール、スッキリした街並み、広い道路、そのきれいに整った街を、感嘆の声をあげて模型をみていた少年達も成人となり、芸術と文化の香りを胸いっぱい吸い込みながら、闊歩していることでしょう。

オープニングセレモニーに出て

八代第三団ボーイスカウト

八代二中一年 森 本 昌 樹

ぼくは、先日、アートポリス・八代街なみ展のオープニングセレモニーにボーイスカウトとして出ました。セレモニーは、アーケードのはしから（三丁目）はしまで（一丁目）と、左へまがり、ことぶきやまでの道のりでした。最初、何をするのか知らなかった僕は、歩き始めてからわかり始めました。しだいに分かり始めていくと、アーケードの人達が目

線を僕に向けたので、とてもはずかしくなり足どりが早くなってしまいました。足どりが早くなるということは、みんなと足があわずみんなばらばらになり、足をみんなそろえるようにと注意を受けました。けど、合わせても、合わせても、ばらばらになってしまいました。

そのほかにも、ボーイスカウトだけでなく、ガールスカウト・すいそう楽のみなさんなど多数オープニングセレモニーに参加されました。と中、止まってえんそうしたり、おどったりと、いろいろなもよおし物がありました。オープニングセレモニーが終るとみんなほっとして、つかれていたようでした。

アーケードや、その他のいたる所にもよおし物会場がありました。とくに、竹製品を売ってある店で、竹とんぼなどを作り、アドバイスなどもうけ、とても上手に作ることができました。その他に、九州電力の電子製品の中はどのような作りになっているのかなどを展示してありました。その会場で、食べ物を作って、サービスとして食べさせてくれる所でぼくは、えんりょせずにおなかいっぱい食べました。他にもいろいろな所にも足を運びました。

いろいろ見ていると、おもしろい物、感心する物といろいろありました。またこんな機会があったら立ち止まって見て行きたいと思う。





イベントの参加が奉仕の心をみがく

ボーイスカウト八代第三団
井 山 裕 文

私達、ボーイスカウト八代第三団は、三十数年の歴史を持ち、現在、小学一年生から二年生のビーバー隊と五年生までのカブ隊を合わせて約四十名と五年生二学期から中学三年生までのボーイ隊約四十名と高校生のシニア隊が五名、更に各隊の指導者と団委員を合わせて合計百名もの人が所属しています。普通は各隊ごとで毎月一回、野外活動を中心として、時には今回の様に奉仕活動にも進んで参加しています。私は小学四年生の頃からスカウト活動を十数年間続け、現在ではシニア隊の隊長という重要な役職に位置しています。

毎年、夏が長期キャンプなどもありメインとなって活動していますが、私にとって今年の夏が一番忙しかったのではないのでしょうか。特に、今回のイベントへの参加は私ばかりではなく、他の指導者の方々や、隊員全員にとっても一番印象に残るものであったでしょう。八代第三団の参加者全員が奉仕の心で進んで参加したこと、また、今年発足したガールスカウト熊本第二十二団との協力が私達にとっての成功を導くものとなったのでしょう。

私は、八月十七日のオープニングセレモニーから、二十二日の模擬店までの行事全てに参加して隊員みんなと行動を共にしましたが、それによっていろんな方々と知り合うことができたし、また、生まれてからずっと住んでいる街、八代について更に多くの知識を得ることができました。そして、「アートボリス」ということについて、それまでだいたいの憶測はしていましたが、よりもっと明確にどういったものであるか理解できましたし、隊員にとっても大変プラスなことになったと思います。

ます。

ボーイスカウトでは、ただ活動することを目的としているのではなく、自分自身の精神を鍛えるために活動の場を設けて進んで参加していき、一つ一つの目標を達成していくもので、そのため、いろいろな階級と章があります。今回の参加においても、そういった場であったために、スカウト全員喜んで参加し、その結果、目標を達した者には、いくつかの章を与えることができました。これは、本当に良かったことであると思います。

今回のイベントで八代という街を市民の方々から県内、県外の方々まで知ってもらえたことが、これからの八代の発展へのきっかけとなったことでしょう。よってこれからもこういった企画をどんどん行って欲しいと思います。もし、再びあるなら、また、その他のイベントでも、私達ボーイスカウト八代第三団に声をかけて欲しいと思います。その時には、喜んで協力していきたいと思います。

懸命に練習し堂々の行進

ガールスカウト熊本県第22団
ブラウニー リーダー 白 井 清 美

アートボリスに参加したら？という声がかかったとき、正直いって、アッこれはガールスカウトをみんなに知ってもらうのに良いのではないか、と思いました。でも、私達22団は、6月に発団したばかりで、とても不安でした。リーダーも若葉マークだし、子供たちのことも、まだよく分かっていないし、どうしよう・・・ 打ち合せ会議に参加しても、ただ話を聞くのが精一杯でした。話が進んでいくにつれ、まわりの方々の真剣さが伝わってきて、不安と同時に、私達も頑張らなけれ

ば・・・と思い始めました。

オープニングでは、ブラウニー（1年～3年）が旗を持って立つこととなり、まだ訓練も良くできていない子供たちが出来るのだろうか、心配しましたが、カブスカウトにも手伝ってもらい、大役をはたすことが出来ました。

何か特色のある団を、ということで、鼓隊でもつくってみたら、という意見はありましたが、まだ、無に等しい状態でした。鼓隊でジュニア（4年～6年）が参加することになりましたが、アレレ・・・太鼓も無いでしょう・・・ 発団したばかりで予算ありません。子供たちもいきなり太鼓なんてたたけるだろうか？考えばかりが、頭の中を、グルグル駆け回りました。そんな時、設計事務所をなさっている前垣さんが助けてくださいました。太鼓は、寿徳商事の岩崎さんの御厚意で揃えることが出来ました。太鼓のたたき方は、ボランティアで前垣さんに教えていただきました。初めの頃は、正直いってこれで大丈夫だろうか？と心配した時もありました。でも、子供たちは毎週、毎週、一生懸命に練習をしました。前垣さんも、とても熱心に教えて下さいました。本番では、堂々と太鼓をたたきながら行進する事が出来ました。本当に、色々な方々のおかげです。ありがとうございました。

どうしよう、どうしようで始めた事が、たくさんの方々に助けられて実現する事が出来ました。くまもとアートポリス'92八代まちなみ展に参加することが出来て、本当に良かったです。子供たちの心の中にも、いっぱい思い出がつまったと思います。私達ガールスカウトも少しだけ自信ができました。これから頑張ります。ご指導の程、宜しくお願い致します。



「こたい」は100点だったな

ガールスカウト熊本県第22団
八千把小四年 綿 島 睦 実

私たち、ガールスカウトは、8月17日にアートポリス in 八代に「こだい」で参加しました。何回かまちがえたけど、自分で思うには100点だったな。と、思っています。

もっとも、最初からじょうずだったわけじゃありません。毎週土曜日に、前がき先生が、来て下さって4時～5時まで集まって練習しました。こだいは、寿徳商事の岩崎さんがきふして下さいました。それまでは、ずっとゴム板で練習してきましたが、それからは、時々外で練習する様になってきました。

何回も練習してきたうちに、もう、本番では、まちがえないかな。と、思いましたが、本番では、たいこの音がひびいたりして、まちがえたりしたら、体中、冷水が通ったみたいに、サーッとひやあせができました。

たいこをおろした時は、もうおしまいかなという気持ちでした。アーケードの中を通っている時は、たいこの事ばかり考えてしまってたけど、少しなれてきたら、みんなの顔をちらちらと見る事ができました。その時は、うれしいと言うよりも、楽しいとか、おもしろ



いと思う方が多かったなと、思っています。閉会式の時の旗もちも、練習がみじかかったから、ドキドキしました。閉会式の際は、リーダーたちも屋上でかきごおり屋さんをしていました。だからみんなにタダでこおりをくれました。私は、ラッキー。と思いましたが、氷はたりるのかな。と心配になりました。

リーダーたちの他に、いろんな集まりの人たちが、バザー・カレー・やきとりなどを売っていました。中では、(室中) 赤いおめなどをかぶって、おどりをおどったりしていました。そのおどりを最初見たとき、何か、少しこわいな。と思ったけれど、よく見れば、ちっともこわくなくておもしろかったです。

本当は、もっといたかったけれど、おそくなるので帰りました。あんまり中の方は見ていないけれど、すごくおもしろかったです。また、来年も参加できるのだったら、参加したいと思っています。

国立八代工業高等専門学校

山頭火と日奈久活性化 計画を通して

土木建築工学科 今村正則・三浦郁子

四月、設計製図として八代まちなみ展への参加作品から三つの課題が与えられた。私たちはそのうちの一つである「日奈久活性化計画」を選んだ。なぜなら、山頭火が日奈久を絶賛したという点に興味をもったからである。

まず、山頭火の資料集めから始めた。雑誌と新聞などから、夕日が美しいことと日奈久を絶賛した俳句「温泉はよい ほんたうによい ここは 山もよし 海もよし」を探し出すことができた。そこで、この俳句を「日奈

久活性化計画」のテーマにしようと私たちは考えた。

日奈久の街並と山頭火が泊まった宿である織屋の現況調査が始まった。街並は国道3号線によって2分されていて、温泉街の中まで入ってくる車と駐車場不足という状況である。これにより温泉に来た客が、車が通るたびに、よけている。港は、ヘドロがたまり悪臭がただよっていた。山は温泉神社のそばに夕日を見ながらのんびりしている女郎居山があった。織屋はというと、かなり改築されており、梯子段や土間や布団部屋などに当時の面影が見られた。

日奈久の現況は悪い所ばかり目立ったが、少し改良してやると必ずいい町になると確信した。なにもたてこわして道を広くしたり、新しい建物を建てなくても、良い要素を持っている町は必ずよくなるものである。これを計画の幹としていた私たちは、温泉街は現況のままにし街路の整備などを計画した。それによって国道から海手側に開発していこうと考えた。

まず温泉街への車の進入を減らすことと、駐車場不足に対応するために、港を埋めたてて駐車場と公園を計画した。織屋は、女郎居山へと移築し露天風呂を作ることにした。その後、何度も日奈久へ足をこび、計画を進めた。

模型の製作へ移って、考えが形に変わってくると、やる気がどんどん出てきた。しかし期限が近づいて来ると、つかれと、これで終わるという気持ちが入りみだれて、ちょっと手をぬいた所もあった。

最後に、八代まちなみ展に参加して、町の人達が自分達の街並を、もう一度見直し、町ぐるみで計画していくためのカンフル剤にでもなれるなら私たちの計画は大成功となるでしょう。

何回も書き直した八代駅前計画

土木建築工学科 下 田 孝 年
原 田 充
廣 田 孝 宏

くまもとアートポリスに関連して、「八代まちなみ展」が八月に行われた。それにあって八代高専では、八代の駅前とアーケードと日奈久の三箇所をより良い街にしようと計画を行ないました。

私達は、駅前を担当するにあたり初めに駅前周辺の代表者の彦一本舗の飯田さんに会って話を聞き、緑と水と人の調和のとれた駅前になる要望がありました。それから私達は、実際に駅前周辺を歩き、市民と駅を利用する人々の関係と球磨川と市民の繋がりを重点的に調べました。

そのあとは、学校で駅前周辺に、これから必要と思われる施設や道路、広場等をどこにどのように配置できるか、また、今までの建物、交通機関を改善することに決めました。改善する箇所は幾つかあり、それを三人で分担しました。

いろいろと悩んだり、苦しんだり、眠かったりして改善箇所の計画は、それぞれ出来ましたが、先生方からは、「あまり良くないなぁ」「ちゃんと考えているのか。」と言われました。しかし、それにもめげずに自分達で考えた事を変えませんでした。

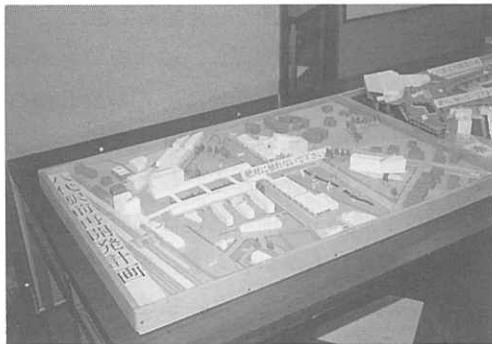
計画が出来たので図面をかくことにしました。図面が終わりかけた頃に先生から「この図面のかき方では駄目だ。」と言われました。

それでかき直しました。が、また駄目と言われて、またかき直しました。結局三回ぐらい書き直し二枚提出しなければならない図面を一枚しか出せない結果になりました。（この図面が出来たのは期限間近でした。）私達

は図面が出来たので模型にとりかかりました。

模型を作る期限には、一週間くらいしかなかったが、三人で徹夜をしたり、もめたりもしながらも、土台と建物の模型づくりに分かれて完成することができました。完成から何日か過ぎ、「八代まちなみ展」が始まりました。

私達三人も八代のアーケードまで行って自分達で作った模型や図面を見たり、他の学校の図面を見たりしました。自分達で作った物が期限に間に合うまでに色々とありましたが何とか出来上がりました。このようなことをさせて頂いたので、学校での卒業研究に役立つことがあると思います。



作品見学者を見て喜びを知る

五年C科 淵 上 卓 広
西 浦 望

私がこの“八代まちなみ展”の依頼を受けたのは桜の散り始めた頃だった。

私達（八代高専五年建築コース）が設計製図の講義を受けているときだった。スーツ姿の男性が三名、そして、何故か白衣の男性が一名訪れた。

彼らは挨拶も早々に切りあげ、それぞれ自分の思う事を私達に話し始めた。それによると前県知事の細川氏が行っていた“アートポ



リス”というプロジェクトの一つとして、今年の夏に“八代まちなみ展”というイベントが実施されるという。これは、八代市民の手によってつくりあげたイベントにしたいということもあって、是非とも私達に八代本町二丁目、駅前、日奈久の3カ所の設計をしてもらいたいということだった。

私達は早速卒業研究の時間を担当の先生方から頂き設計をはじめた。しかし、私達はこのような規模の大きい設計は初めてで、何から手をつけてよいのか解らないまま数週間が過ぎた。月日の過ぎ去るのが速いことやっと気付いた私達は、何も解らないままデータを集め始めた。集めているうちにその土地、場所の長所、そして短所が見え始めてきた。

私達は長所を更に伸ばし、短所をできる限り無くすような設計を進めた。この設計の与える影響は学校の定期試験、就職試験、大学編入試、そして夏休みととても大きかった。

イベント開催十日前。私達は完成予定日を一週間過ぎたにもかかわらず、まだ完成させることが出来ていなかった。私達はワラにも縋る思いで徹夜を繰り返した。そして、つい

にイベント開催一週間前、図面・模型共に完成させることが出来た。その夜、私達が満足感と解放感に満たされて死んだように寝たのは言うまでもない。

数日後、私達は作品を会場まで移動させた。その際、思わぬ出来事に遭遇した。市役所、そして、各街の方々に穴があったら入りたいほど褒めちぎられた。

イベント当日、私達は「所詮は内輪のイベント、客が2、3人いたらいい方だろう。」そんな事を話しながら門をくぐった。するとそこには平日にもかかわらず二桁におよぶ人々が作品を批評していた。その時私達は猛烈に感動し、建築設計の喜びを知った。

イベント最終日、大学、建築家の先生方による県内外からの四百名の参加者を迎えたシンポジウム、意見交換会が行われたが、その場で私達の作品にかかわる言葉は一言も聞くことは出来なかった。しかし、私達は県内外を問わず多くの人々が興味をよせ、参加してくれたこのイベントに参加できたことをとても誇りに思う。



切 10 日に涙と汗

土木建築工学科 松 島 剛 嗣
釘 嶋 文 智

今回、八代まちなみ展に参加することになった、“きっかけ”は、街の人達からのイベントへの呼びかけであった。

自分達は、前々から八代の街の殺風景さに不満を抱いていた。そこへ、今回の話が飛び込んできたので、これを機に自分達の八代への不満を明確に提示し、自分達の若い考えを市にぶつけようと思った。

四月のある日、見なれない人達が数人こられて、先生より紹介があった後、数人の日奈久、八代駅前、本町2丁目の再開発に携わる人による説明が長々とあった。その中で最も不満があり、より良くなる要素のある八代駅前の再開発に自分達は決めた。

しかし、それからの三カ月は、始めの勢いもなくなり、だらだらと過ごしてしまった。

「パチンコもしました……。」

「カラオケにも行きました……。」

「女性とイチャイチャしてました……。」

面白かったな〜。

といった風は無駄な三カ月を送ってしまった。

夏休みも八月に入り、いよいよ切もあと十日にせまった頃、自分達二人は、涙と汗を流しながら頑張り始めた。

「雨にも負けず……」

「風にも負けず……」

といった詩にもある様に二人は台風の中で飛ばされそうになりながらも登校し続けた。初心に戻り、自分達の考えを市へでつける為に……。」

八代の駅前、殺風景で面白味がなく、交通の面でも、歩車分離されておらず混雑している。この様な点を少し変えて緑を増やせば

よいと思っていた。

が、それでは、面白味に欠けるので、八代駅前を“水と緑と音と光”をテーマとし、また、アートポリスは、ある意味で一つのお祭といった所から、良く言えば、「夢のある」悪く言えば「無茶苦茶な」設計をした。

その結果、思っていたより、街の人や、特に子供に人気があり、評価された時、少しでも街の人達に自分達の考えが伝わったんだという事が実感できた。



苦勞した模型づくり

土木建築工学科 坂 本 昭 信
山 道 泰 伸

私たちが、八代まちなみ展の依頼を受けたのは、4月の始めの設計製図の時間でした。

治部先生となにやら市の関係の人がやってきて熊本アートポリスにともない、八代を活性化しようと、本町アーケード再開発、日奈久再開発、八代駅前再開発という3つの計画を説明され、我々建築コースの学生に、それぞれ2人か3人で担当し、この八代まちなみ展を成功させてほしいというものでした。

私達はその話を聞いたとき、はたして我々のような建築をすこしかじった者にそんなことができるのかという不安は正直ありました。



その後、1つの計画に2チーム2人ずつで担当し、私達（山道と坂本）は、八代アーケード再開発をやることにしました。

最初はいろいろな案がありました。高い塔を造り、遠くからの客の目を引き、その下を商店街とし、人や車が通るといふ案や人と車を分離させるため上下に道路を設けようとする案などがありました。

しかし案を進めていけばいくほど欠点が生じ実現できそうもないものになっていきました。

我々は、いきづまったため一度本町アーケードの人に話を聞くため、他の一チームと一緒に出かけることにしました。

本町アーケードの人は我々に、今のアーケードの現状、今後の計画などくわしく説明され、21世紀駐車場あたりをもっと手を加え有効に利用したらどうだろうかという案をもらいました。

私達は計画を進める中で、まずアーケードを設けるべきかとり除くべきか悩みました。アーケードを設ければ、雨の日の買物が楽だけど、全体的に暗く風通しもよくない。アーケードをはずせば、またアーケードの逆の問題が生じる。

そこで私達は、一チームはアーケードを取り除いたモールにし、私達のチームはアーケードをつけることにし、それぞれのやり方でいい所をみつけていこうとで話がまとまりました。

私達はまず現状のアーケードの長さに単調さを感じ、二つに分けそれぞれの顔をもたせ、中心にその核となる高層の商店集合体を設けました。アーケードはドームをつけることでリズムをもたせました。

模型はアーケードをきれいに见せるため透明プラ板、プラ棒をつかいました。ここで一番苦労したのは、アーケードが曲っている所

で、何回かの失敗のすえやっとできました。

こうしてこの計画は無事に終らせることができ、市の人々にも喜んでもらえ大変うれしく思っています。最後に、このような企画に参加させてもらい、今後の卒業研究に役立ち大変うれしく思っています。



ギリギリにやる気

米 沢 弘 樹
梅 田 洋 介

四月初めのある日、五年生に進級して、第一回目の設計製図の時間、皆が今回の製図の課題は、どの程度きついものなのか緊張していた時、建築学科の名物先生こと、“J先生”がいつもと変らぬあやしげな含み笑いを振り撒きながら、ヒタヒタと足音を響かせ、製図室に入って来た。その時、私達は、にわかに緊張感が増していくのを感じずにはいられなかった。

ふと気付いて辺りを見回すと、なんと、J先生の周りには、見た事もない数人の中年の男性がいるではないか、一瞬製図室がざわめき、疑問に思った一人の学生がすかさず質問をあげた。「先生、そんな人はだっすか？」すると、J先生がコテコテの大阪弁で「まー待てや、今回の課題は熊本アートポリスの一環として行われる八代まちなみ展に参加する

ことになっとなんや、と」と答えた。そして私達は、数人の男性の正体がなんとなくわかった。それから次々に紹介され、ついでにどういふものなのか説明があった。それから私達と八代まちなみ展の五ヶ月という長い長い日々が始まったのである。

私達は八代まちなみ展の中の一つの日奈久の再開発の設計を担当した。

初めのうちは、やる気がないせいか、何かから手を付けて良いかわからず、アッという間に2週間が過ぎた。そんな時にもう一つの日奈久再開発の設計を担当しているI・M君が「現地調査に行こう」と提案した。現地調査に出掛けた私達4人は、日奈久の再開発を依頼した松本さんに案内されて、日奈久を見て回った。

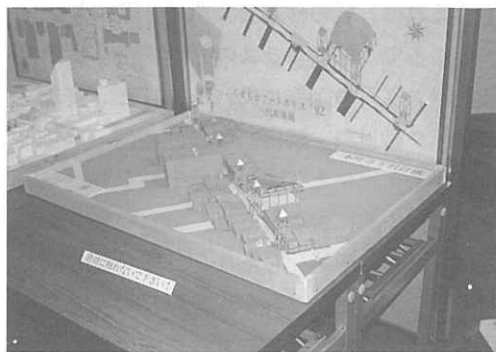
そして最後に、山頭火が泊まったと言われる「木賃宿 織屋」を見る事が出来た。「織屋」をいろいろと実測して見たが、私達の班は「織屋」を今回の設計の中に盛り込むという企画は棄却した。その理由は「織屋」の持つ雰囲気がある今回の私達の設計の内容に合わない判断したからだ。

その後も、このような調子で時間だけがたただだ過ぎていき、残りの時間も少なくなった「ギリギリの状態」でやっと私達に「ヤル気」が出た。それから先は、時間との闘いとなった。

八月も半ば近くになり、お盆も締切りも近くなった頃、連日の夜中までの作業の成果が実って締切り前に終わった。終わった時は、作業を成し遂げた充実感と、もう少し良い作品を作りたいという劣等感と連日の作業による疲労感とが入り混じった不思議な気持ちになった。

四月から八月までの五ヶ月間、日奈久の再開発に携わりいろいろな貴重な経験が出来た。今から考えると、とても良い体験になったと

思っている。



ポスターは博物館から七色の虹

熊本県立八代工業高等学校

インテリア科三年 野田 真由美

私達、八代工業高校インテリア科三年生四十一名は、「くまもとアートポリス'92」の一環として開催された、「八代まちなみ展」に参加しました。その中で私は、「アートポリス'92 八代まちなみ展」のPRポスターをデザインしました。しかも、そのポスターは印刷され、街の至る所に掲示されるというので、そのような大役が私に勤まるのだろうかと心配でした。そんな不安を胸に、私の制作は始まりました。モチーフは、建築家・伊東豊雄さんデザインの八代市立博物館・「未来の森ミュージアム」です。

アイデアとして、まず浮んできたのは、真青な空の下に、ゆるやかなスロープを持った博物館が銀色に輝いている情景でした。博物館は、それ自体がイラストになるようなデザインですが、未来の八代を象徴するポスターとするには、もうひと工夫する必要がありました。そこで考えたのが、博物館から天へ向って伸びる七色の虹です。爽やかな青空を背景に博物館を描き、エアースプレーで虹を仕上げて作品は完成しました。この虹に、八代の



明るく希望に満ちた未来を、少しでも感じてもらえれば、私の作品は成功だと思います。

ところで、私のクラスの10名程は、八代の観光ポスターの制作に携わりました。球磨川の清流や妙見祭、晩白柚など、八代の名所や特産品をテーマとしました。それぞれ、テーマを、抽象的に表現したり、美しい色彩の風景にしたり、単純化したりと、思い思いにデザインしました。それぞれ苦心しながら取り組んでいましたが、本町アーケード街の展示会場に飾られた時は、満足した様子でした。また、他の30名は、将来の八代の街並を想像したドローイングを手掛けました。それぞれ本町アーケードを高層化し天井をガラス張りにしたり、駅前の通りに球磨川から水を引き魚を泳がせたり、また、日奈久温泉街をプラネタリウムに仕立てたりと、楽しく明るい八代をイメージし、着彩透視図としてデザインしました。

このアートポリスに参加した事は、八代の将来を自分達のものとして考える事が出来たので、大変有益だったと思います。クラスの41名も同じ思いだと思います。

「ついで」の催を恒例に

八代ギターアンサンブル
竹原俊次

私たち、八代ギターアンサンブルが、八代まちなみ展に参画させていただいたことを、たいへんうれしく思っています。

屋外で、コンサートを催すことは、私たちにとって夢だったのです。実は、昨年、戸外でアウトドアコンサートを企てまして、市内の適当と思われる場所を歩き回ったのですが、騒々しくて、とてもガマン出来ず、断念した

事がありました。ですから、今回の本町緑地でのコンサートは、ついでの催しとはいえ、このような雰囲気でのコンサートが出来た事に、大変な意義を感じています。ただ残念だったのは、時期が全く良くありませんでした。でも、しかたありません。

これを契機に、ついでの方の催しを是非、恒例にしたいなと思います。



アートイン通町ミュージアム ストリート八代

通町商店街振興組合

アートイン企画部長 山 川 敏 光

この夏のイベント“アートイン通町ミュージアムストリート八代”という、大壁画作成を終えてもう2ヶ月になろうとしている。

マスコミに何度となくとり上げられ、県内外に通町商店街の名を多少なりともアピールできたと思うが、町づくりはこれで終わったのではない。

イベントは一つのプロセスでしかない。何もない町、シャッターの下りた殺風景の町が、少しは明るくきれいになったが、我々に残ったものは、それ以上に大きなものだった。

イベントを通じて、いろんな団体や個人の方々と知り合うチャンスを持ち、それが個々の町づくりに対する考え方や仕事に対する

取り組み方を変えさせていった。

それに町内に住んでいながら、今までは単に挨拶ぐらいしか言葉を交わさなかった人達と、口泡を飛ばし熱く町づくりを論議し合い、互いに汗をかき、早朝や深夜まで一つの目的に向かって心を一つにして行動を共にし、相互間の信頼を得ることが出来た。

これは、将来町づくりを推進する上で多大なパワーとなるにちがいない。

通町の場合、“文化の薫る町づくり”というコンセプトで町づくりにアプローチをかけている。何もなかった町から振興組合を設立し、1年あまりの時間が流れ、県・市及び外部団体の多大なる支援を受けながら、町づくりとは何であるかを一人一人がやっと真剣に考えはじめたと言えるだろう。

これから先、一番望まれるのは若きイノベーターの育成ではないだろうか。

これは、通町だけに限らずどこの町も考えている問題であると思うが、若い人間若い経営者にとって魅力のある町を作ることが、現在



町づくりを推進していこうとしている人間にとって大切な課題である。



歴史と調和するまち

九州共立大学

工学部教授 尾道 建二

「まちづくりにおける歴史的建築と新しい建築のあり方について考えてみよう」、と言う事で「八代のまちシンポジウム」の案内を頂いた時、八代市でいったい何が起きているのか正直なところ判らなかった。私たちがみたいに、工業都市、北九州市に住んでいると、八代市と言えば、球磨川の清流と八代海の磯の香、そして、青々とした田園が拡がり、遠くには天草の山々を遠望する。このような風景の中に、工業都市や都会にはない日本の田舎の風景をイメージしてしまう。しかしながら、同時に、田舎臭い田園都市の中にノスタルジックな故郷を想う郷愁を呼び起こしてくれる街である事も事実である。

かつて、厚生会館と松浜軒を訪れた事がある。私たちが学生であった頃、八代市厚生会館は、建築家、芦原義信氏の手による名建築であり、当時の建築学生たちが市民会館等のオーディトリウムを設計する際、一度は見えておかねばならない教科書的な存在であっ



た。厚生会館の設計は、八代城の城壁と堀を取り込み、八代城の歴史的遺産を都市空間の形成に活かす明快な配置計画とデザインであった。その配置計画とデザインは今も八代の町並みの中で変らぬまま生き生きと息づいているのには驚かされる。

ところで、八代城の歴史的遺構と厚生会館が造り出す都市空間の一角に、あたかも、風になびく様なさわやかな八代市博物館が建設された。熊本県アートポリスの一環として建設されたと言われるが、この八代市博物館を巡って様々な論議が起こったとも言われる。博物館と言うと、一般的に「博物」という歴史的な重みから来る重厚なデザインと造り、というのが常識的であろう。しかしながら、物造りの人間にとって常識というのは極めて厄介なものでもある。なぜならば、物造りの人間は絶えず、その時代と直面し、歴史の最先端で仕事をしているからである。そのような意味で、建築家は歴史的文化の切り羽で仕事をしている事になる。八代市博物館は常識的なデザインとは言えないが、平成三年という時代を表現した歴史的建築でもある。

私の住む工業都市、北九州市は官営八幡製鉄と共に歩んできた街である。工業都市の発展は古い物を新しい物へと絶えず変えて行った。このような歴史の中で、明治時代より以前の物はあまり多くは残っていない。しかしながら、都市の創造には歴史的文化遺産は必要であり、歴史的な物も現代と共に必要である。工業都市、北九州市が失った歴史的文化遺産の喪失はあまりにも大きい。

当日、八代市博物館は若い学生の熱気で溢れていた。遠く関東地方からやって来たという。厚生会館が多く建築学生を引き付けてきたように、新しく建設された八代市博物館も若い人々を引き付けるエネルギーに溢れている。このエネルギーは都会にはない歴史と

調和する豊かな八代市のまちづくりと活性化を引き起こしてくれる事は言うまでもない。

—43—

第 三 章

これからのまちづくり

1. 真の豊さを実現する仕組みを	市議会議員	小 菌 純	— 47
2. 粋 な ま ち	市議会議員	木 田 哲 次	48
3. 八代まちづくりについてもっと街に出よう	伊東建築設計事務所	伊 東 豊 雄	48
4. まちづくりについて	熊本大学講師	桂 英 昭	49
5. 八代への期待	熊本県建築課アートポリス班	田 上 文 徳	51
6. 潤いのある人間関係を大事に	八代土木事務所景観建築課課長	宮 村 和 成	51
7. 公共建築とまちづくり	八代市建築課係長	井 本 恵 英	52
8. 更なる発展への動き	八代土木事務所景観建築課参事	坂 口 秀 二	53
9. 祭を成功させたエネルギー	八代市企画調整課係長	上 野 美 磨	54
10. 人々が提案する街づくり	八代高専教授	治 部 睦 郎	55
11. 八代の夢（ビジョン）をつくろう！	八代高専教授	黒 瀬 重 幸	56
12. グルメとレジャーとショッピングの街づく	二之町振興会会長	山 川 昭 三	57
13. 商店街の町づくり	本町三丁目商店街	山 浦 滋 男	58
14. プロ集団としての自覚	建築設計監理協会会長	豊 岡 幸 夫	58
15. 意識改革 文化都市八代を目指して	八代美術協会会長	山 下 益 雄	59
16. 風土に合った独自の演出を	八代市市街地開発課	谷 脇 信 博	60
17. 専門家と町づくり	建築設計監理協会	長 藤 範 夫	61
18. 建築を地域全体の視点から	建築設計監理協会	下 野 健 一	62
19. 官民協力で地域としての町づくり	建築設計監理協会	澤 田 修	63
20. 私なりの町づくり	建築設計監理協会	杉 本 靖	63
21. 我々も市民と一団に	建築設計監理協会	小 林 慶 助	64
22. 欠点再発見のすすめ	建築設計監理協会	太田黒 元 雄	65
23. 町を掃き清める	鹿児島大学工学部教授	土 田 充 義	66
24. 八代のまち	九州産業大学工学部教授	佐 藤 正 彦	66
25. 文化の継承と歴史のまち八代	八代市教育委員会文化課	原 田 聰 明	67

第三章

真の豊さを実現する仕組みを



八代市議会議員
小 蘭 純 一

“くまもとアートポリス'92 八代まちなみ展”が建築関係者各位のご尽力のもとに盛会に終了することができました。

この機会をとらえ、これからのまちづくり、或いは街並み形成にどのように活用できるか、を考えてみました。

近年日本は非常に豊かになりました。豊かになったのは物であり、サービスであり、職業選択の自由であります。

人間社会は自由と平和のために、そしてその具現化のために、公的機関や企業の形態が採られています。

今や、公害問題においても、最も進んだ国とさえいられています。

そのような中で、現実において、未だ豊かでないものは、時間と街並みではないでしょうか。

建築家が街並みという時、都市としての機能を度外視し、空間的なものを指している事が多いものです。しかも多くの場合、建築物を中心として語られます。

また、建築家は設計を通じて、美しい街並みの形成に寄与するものとも言います。

しかし、それは建築基準法の枠の内ではしか活用の基盤はありません。しかし、町づくりは、街並み形成はというと、話しは別となります。

都市は様々な目的をもって形成され、多く

の機能が相互補完する。高度に人為的立案・調和・調整する作業が建築家には必要とされます。

まして、そこに住む人には街並みに活性化を求める反面、落ち着いたやすらぎを求めていることも確かです。

今一番豊かさから離れているもの、それは本当の豊かさを実現するための社会の仕組みではないでしょうか。

街並み形成に関しては、それは行政、その中の土木行政が鍵を握っており、現実的に大きな影響をもっていると思います。

土木行政には道路・河川・港湾・都市計画・建築住宅などそれぞれの部門が揃っています。

それらを有効に機能させるには、その仕組みを積極的に変えなければなりません。

単に執行機関というのではなく、もっと積極的に高い文化性と地域のビジョンを高らかに唱えても、決して、おかしくなく、それは時代の要求でもあるのです。

リフレッシュするためにわざわざ遠くに行く事もなく、我が街並みが日常的にその機能を果たしてくれるため、地域住民が一体となって考える街並みにすることが、真の街並み形成の基本でありましょう。

町づくりのプロセスは、地域の各主体(住民・建築関係者・行政)が連関性を維持し、町づくりを通して、意識行動を高めるムーブメントにすること、次代を担う子供達の心に住まいや地域づくりの心を高める。……いわゆる、仕掛けをすることが大切です。

また、自主的主体的に各々の多様性を尊重し、地域住民の町づくりを推進することが、最大の目的であり、熊本型「H O P E」計画といわれる由縁ではないかと、想う今日であります。



粋 な ま ち



八代市議会議員
木 田 哲 次

この八月に行なわれた「くまもとアートポリス 92' 八代まちなみ展」は、二十一世紀の八代の都市計画に、大きな眼に見えない一石を投じるきっかけになった気がします。市民の方々は、アートポリスという耳慣れない言葉から、その意味することの必要性を漠然と感じ取られたに違いありません。

戦後四十七年、経済成長に伴い車社会の到来と、合理性、便利性、機能性の追求の結果八代のまちも御多分にもれず、すっかり様変わりして参りました。しかし変わることが決して悪いことではなく、その変わり方に、住む人々の心意気と誇りが加味されて行けば、どこにでもある様な画一化された味気ないまちにならないでしょう。

古い歴史を持つ城下町八代、そこに住んだ人達の八代の住人としての誇りを粋に感じて暮らして来た歴史ある八代、その遺産や足跡がまだあちこちに残っているまち八代……。

でも今その誇りが希薄になりつつある気がするのです。町域に拡散により、住人の減少による人的活力の低下も一因でしょうが、数百年と培われてきた町の名の消滅も大きな原因のひとつの様な気がするのです。たいへんアバウトな言い方で申し訳ありませんが、歴史に裏付けされた八代のまちの特性を、行政も市民も原点に戻り考え直すべきではないでしょうか。

人間各々個性があるように、まちなみへの美意識、価値観も各々違うのかもしれませんが、でも旅先で、いろいろなまちのたたずまいに

触れる時、心暖まる落ち着いた路地と、無機物的で画一的な通り、景観に出会います。やはり八代は、歴史の重みを感じながら心暖まる誇りある粋なまちなみが似あうと私は思うのです。

そこで一番大切なことは、住人の誇りと心意気を取り戻しながら、新しい都市計画と、パッチングさせて行く地道な努力が必要でしょう。それには旧町名の復活も住人と行政とのコンセンサスを得るひとつのきっかけになるかもしれません。

若い人達が粋に感じるまち、お年寄りが心落ち着くまち、これは同じ次元のまちづくりだと思います。

八代の街づくりについて もっと街に出よう

伊東建築設計事務所

伊 東 豊 雄
(建 築 家)

市立博物館〈未来の森ミュージアム〉の設計等で、この4年間、たびたび八代を訪れた。沢山の人々と知り合い、語り合うことができたが、情が深く、明るく、開放的な土地柄にすっかりほれ込んでしまった。これは決して私だけの印象ではない。この夏「アートポリス 八代まちなみ展」に全国から訪れた若い人々の多くからも同様な感想を聞かされた。私自身、いまでは住んでいる東京よりも、この街へ来た方が落ち着いてほっとするようになりつつある。

この間に八代の街もずい分変わった。中心部では次第に高い建築物が建ち始め、小さな公園や遊歩道も整備された。訪れるビジネス

マンや外国人も増え、ホテルの客室も満室で予約できないケースが多くなった。4年前には考えられないことである。経済活動が活発になっている証拠であろう。

人々の暮らしが豊かになるのは誠に結構なことであるが、傍で見てみるとどうもその豊かさに自足しているように思われる。八代の人々が自慢にしている妙見祭にしても、自分



達だけで楽しんでいるように見えてしまう。あれだけの伝統を保ち、勇壮なお祭であるにも拘らず、博多どんたくや長崎くんちのような知名度に欠ける。街の人々がもっと食欲に外にアピールし、全国から人を集めようという積極さにいまひとつ欠けているような気がしてならないのである。

また八代の人々にとっては、「水」特に球磨川の水が最も八代をイメージさせるものであるようだが、実際に街を訪れて水をアピールする場所は皆無である。城趾の周囲もかつては幾重にも濠が巡っていたと聞くが、現在はその面影もない。もっと人々の生活を水に近づけ、ウォーターフロントを楽しむ開発はできないものだろうか。例えばシドニーでは夕刻になると、街の人々が皆湾岸に集まってきた水を眺めながら、飲み、食べ、歩き、恋

を語り合っている。

初めて八代を訪れた頃、私は一日の仕事を終えた夕刻に人々が街を歩いているいないことに大変驚いた。温暖な気候に恵まれた南国であるというのに、人々は皆車で家に帰ってしまうか、或いはクーラーのきいた店のなかに籠って飲んだり歌ったりしているのである。東南アジアの都市のようにもっと屋外を歩き、屋外で飲み、食べれば、街の賑わいが皆に伝わってくるのにと大変惜しい気がしたものである。恐らく街のなかに、人々が集ってきたくするような屋外の公共空間が少ないからであろう。

これからの最も未来的な都市とは、ヨーロッパ的な近代都市ではなくて、屋台で人々が群らがっているような粗野なエネルギーと新しいテクノロジーが唐突にドッキングしたところに開かれるのではないだろうか。もっと皆が街に出て活気と賑わいを目に見えるようにすることが、これからの街づくりのまず第一歩のように思われる。

まちづくりについて

熊本大学工学部建築学科

講師 桂 英 昭

◆ まちづくりの解答は一つではない。

八代の博物館の計画があったとき、おそらく殆どの方は周囲の環境から土蔵風などの建物が建つことを予想していたことでしょう。しかし、解答（実際に建った博物館）は皆さんの予想を鮮やかに裏切ったのです。こんな表現もあるのかと。この建物が快い刺激を与えてくれるのは斬新なカタチが故ではなく、むしろ敷地や歴史的要素、八代の未来までを



深く読んでいるからです。

まちづくりも同じです。八代では、表面だけの映画のセットのようなまちを、このま



ちは歴史があるからという短絡的な考えだけで画一的につくるようなことに疑問をもつようになってきていると思います。

解答は一つではない。この意味は、色々な年齢層、色々な立場からの意見を多く取り上げれば良いというたぐいのものでもありません。最終的には、まちづくりにおいても各段階で一つの方針をださなければならないのです。固定化された考え方を含めて、幾度もあらゆる可能性を取り上げて、住民と行政、専門家が同じ意識で検討を重ねた結果は一つであっても、単なる一つの解答ではないのです。次に建つ公共建築や町並みが純日本風であっても、皆で検討した結果であれば、それも解答なのです。

博物館は、今や日本いや世界のまちづくりのシンボルとなりつつあります。そして、この博物館は八代にあるのです。

◆ 自分達のまちづくりー参加から参画へ

八代まちなみ展は、他の地域の人々から驚きの目でみられました。市民の人達の企画と行動力に対してです。そして、行政や専門家

との連携も評価されました。

これを機会に、国や県、そして市などの行政指導型のまちづくりなどにも積極的に参画してはどうでしょう。単なる御飾りとしての住民参加ではなく、はっきりとした意志を持てば参画するチャンスはいくらでもあるのではないのでしょうか。

「総論賛成、各論反対」とよくいわれますが、これは総論の時点で住民の参画がなされていないことにも原因があると考えています。まちづくりの楽しさ、そして問題の多さをスタートから論議する姿勢が大切です。

八代まちなみ展は、なかなか真似のできない企画でした。次は真似のできないまちづくりを。

◆ 都市・まちのバイオリズム

都市計画やまちづくりにかかわって、都市やまちにもバイオリズムがあるのではと感じるようになりました。

景気の変動やスケールの大きな開発などがあっても都市やまちが動かないことがあります。反対にほんの小さな動機で大きく変化をすることもあります。おそらく、都市やまちが動くには、経済、行政、住民、雰囲気、外部の協力者、時代の要請等々が同じうねりで同調していないとうまういかないのでしょう。

ここでいう、都市やまちが動くというのは建築や公園、道路などのハードができるという意味ではなく、ソフトも一緒に活発な連動をしていることをいいます。

八代市は10大プロジェクトという計画が発表されていますが、ここにきてやっと都市のバイオリズムとこれらの計画が一致しそうな気配がしています。この10年か20年に一度のチャンスを逃さず、この20世紀最大の八代のまちづくりを成功させて欲しいと願っています。

バイオリズムが上向きのうちに。

八代への期待

熊本県土木建築課
アートポリス班

KAP事務局 田上 文徳

始まりは今年の八代建築設計監理協会の新年会でした。その席上、「まちなみ展」をこの八代で行いたいと申し上げてから、有志の方々にお集まりいただき、第1回目の会合を持つのにそれほど時間はかかりませんでした。3月まではN田さん、T瀬さんらの努力で少しづつ参加団体を広げながら準備会として会合を重ね、4月3日には「八代まちなみ展」実行委員会が設立されました。それから僅か3ヵ月半で、これだけのビッグイベントを開催したわけです。今振り返って思うと、よくやったものだ、スタッフながら感心しております。これは、取りも直さず八代の皆さんの結束の固さと努力の証明ではないかと思えます。

「まちづくりは人づくりから」と、よく言われます。今回のイベントでは、正に八代の人材の豊富さを見せつけられました。私は4年間八代に勤務しておりましたが、認識不足だったことを恥じ入ったしだいです。

今回の催しの成果は、3つあると思います。一つは、多くの皆さんに八代を紹介できたこと、二つ目は、八代のまちづくりについて考える足掛かりになったことです。そして最大の成果は、文化、音楽、商工、観光、婦人、学校、建築関係団体や行政などあらゆる分野の75もの団体が一致して一つのイベントを成し遂げ、新しいネットワークを作ったことではないでしょうか。

この組織こそが、今後の八代まちづくりにとって最高の財産になるはずで、一度作っ

たネットワークを自然消滅させないような行動が継続するよう期待しております。

八代におけるまちづくりのキーワードは、たくさんあると思います。「商店街のまちづくり・活性化」、「球磨川駅跡地再開発」、「八代駅前整備」、「建築協定・地区計画」、「臨港線沿線景観整備」、「日奈久の活性化」、「お城と博物館」、「水路を活かしたまちづくり」等々。数え上げればきりがなくらいです。これらの取り組みは同時には、できないかもしれませんが、官民一体となった今回のネットワークを活かせば（市民の意見を集約したり、さまざまな団体が関係する分野のまちづくりに手を取り合って取り組んだり……）、比較的スムーズに進んで行くのではないのでしょうか。

これらは、一口で言ってしまうと簡単なことですが、実際には地道な努力が必要です。今回のイベントに携わられた方々の輪が広がり、みんながまちづくりに関心を持っていたくことを期待しています。

潤いのある人間関係を大事に



県土木事務所景観建築課
課長 宮村 和成

くまもとアートポリス'92 八代まちなみ展が、市民の皆様はじめ、関係者御協力のもと、県下のイベントのトップをきって、成功裡に終了しましたこと、これ、一重に、市民の方々のまちづくりに関する熱意の賜ものと、敬意を表するものです。

昭和63年から本県の、まちづくりのひとつといたしまして、「くまもとアートポリス」



構想が「熊本らしい田園文化圏の創造を大きな目標に掲げ、具体的にその手法を行なっているところでございます。」

今やまちづくりに関する情報、イベント開催等は日常的に、全国、津々浦々、企画構成されているのが実情でございます、その裏には単なる経済的豊かさの追求ではなく、生活の質の向上、或いは、地球規模的な、環境といった、真の人間性の価値を求める意識が身近な生活の場での、まちづくりに強く求められております。

さらに地域の産業、経済等の総合性を図りながら、地域の文化、伝統など、老人が築いた歴史的遺産を大事に活かしながら、次の世代に引継ぎ、後世に残す責務は市民の皆様でございます。さらに新しく創出を図る個々の建物、或いは社会資本の整備等、個人の資産にかかわらず、環境の形成に、人が感じて、意識にとどめる行為（デザイン）が、今、強く求められております。

今回の八代まちなみ展は、まさしく、多くの市民の皆様、参加のもとに、準備が進められ、その過程を大事に開催できましたことは、潤いのある人間関係を育む、空間構成がなされたものと、市民の皆様はじめ、他県の人々にも深く感銘を与えました。これからの八代を考える母体として大事に、人々の絆を保っていただきたいと思っております。

イベントの効果を速、期待することも大事ですが、市民の皆様お一人、お一人が、歴史を創造する真念のもとに、時間をかけ、こうした市民参加の手づくり等を、数年おきに、開催し、その過程、或いは成果を多くの方々に御覧になっていたゞき、又、顕彰を行ない八代らしさの、整合性を図っては如何でしょうか。

又、今回のイベントを機会として、これからの「キーワード」は、歴史創出の八代、と

位置付けし、人々のネットワーク作りの基礎として続けることを期待します。



公共建築とまちづくり



八代市建築課
係長 井本 恵 英

多くの地方自治体において、住民のアイディアを生かしたり、地域の特性に合った条件や実施要綱によって、住民主体の「まちづくり」、「むらおこし」運動が進められている。そこでわがまちにおける「公共建築とまちづくり」について述べてみたい。

まず施設の計画、設計に当たっては、営々と築き上げられて来たまち個有の生活文化を大事にし、常に地域の核として位置づけ、その地域に新しい顔をつくるということを念頭におくべきである。そこで地域の現況を定量的、あるいは定性的に据え、その地域の特性、特色を浮かび上がらせ、さまざまな条件の把握を的確に行い、その中で地域にあった施設の景観、美観を考えていかなければならない。

そのように配慮したデザインこそ「時」を越え、地域に馴染み、更には地域を活力ある

コミュニティに流動してゆく。また、地域の資源（地場産業）をより積極的に活用することで、地域経済の活性化をも企てなければならぬ。

施設の中で建物は特に同じ条件でも設計の仕方によっては質が大きく違ってくる。条件や制約のもつ諸々の問題点を解決していく努力はもちろん必要であるが、質の高い建築にまとめあげる（仕上げる）センスと技術力、いいかえれば優れたデザイン能力を持っていることが最も大切である。そのためには意欲的で有能な建築家の参加が不可欠であり、まちづくりに一貫して取り組む、ひた向きの努力と姿勢があってこそ、一つのストーリーとして「まち」をいきいきと演出させるのである。

公共の施設は共通の財産である。それゆえみんなが誇りのもてるものでありたい、と同時に常に話題性を伴いさらには、地方（本市）から独自の新たな情報を発信するという気概をもち、建物は生活を囲むもの、包むものとする建築観を変え、建物は生活を演出するものであるとの認識で、統一された美として、永久に生きづく未来の文化として捉え、各々の施設を点から面的に展開させることで、ストリートファニチャー、建築、公共空間のデザインのコンセプトが地域構造の変化ばかりではなく、生活ひいては人々の意識構造にも大きな変動が生じ、わがまち八代の歴史と文化、市民生活を映し出す鏡となり、我々の知的刺激となって、更に魅力あるわがまち八代の姿が出現する。

また、行政はまちづくりに携る人々を支援し、一方では手本となるモデルを率先して示し、まちづくりに関する情報、交流の促進など啓蒙普及活動を積極的に行い、一人一人の関心を呼び起こし、まちづくりに対する意識を高め大きな輪として広げていかなければならぬ

い。

まちづくりは運動でありまた事業である。運動が長く継続していくためには事業として成立させることが大切であり、逆に事業として成立させるためには運動がこれを下支えすることが大切で、そのため運動、事業を推進していくチーム（システム）が地域（職場）の中で内発的に生まれ育ち更にチームの良きアドバイザーとなる専門家を地域の中に育てて行かなければならぬ。

更なる発展への動き

熊本県八代土木事務所景観建築課

参事 坂口 秀二

8月17日から23日まで行われた、「くまもとアートポリス'92八代まちなみ展」に参加して、次のようなことが強く印象に残っています。

- 1 八代市の各団体の方々が、こぞって参加協力していただいた。
- 2 以前から八代市民の方の芸術、文化に関する見識の高さについては聞いていたが、今回目の当りにみる事ができた。
- 3 八代建築設計監理協会や建築士会八代支部の方々の献身的な活動。
- 4 八代市建築課の方々をはじめとする市職員の方々の強い意気込み。
- 5 各町内の方々の惜しみない協力。

そしてこれらの寄り集ったまちなみ展を省みれば、文化とは、そこに住む人たちが共有できるものでないと、後世には残らないのではないかと、そして、そこに住む人たちがそれに夢中になれたものだけが、結局現在まで残っ



ていたのではないかと考えるようになりました。このように見てみると、今度の「八代まちなみ展」は11月に行われる「熊本アートポリス'92 国際建築展」に対しても、一つの重要なメッセージを与えたのではないかと思います。

そうして、このように市民の方が一致して参加して頂いたまちなみ展は、更なる発展への前兆ではなかったのではないかとされます。八代市立博物館は出発点であり、これからさらに何かが出現したり、新しい展開が見えてきそうで、そちらの方がよほど気にかかってきます。都市ギャラリー回廊展で見せてくれた市内各高校、高専の生徒の皆さんの提案した「駅前の再開発プラン」、「アーケード構想」、及び「日奈久再開発プラン」を見れば、更なる八代の発展への力が湧き出している事が感じられました。

工業のまちから創造的産業と文化の調和した新しい「まち」へ発展して欲しいと一人考えながら、そして日頃の仕事を通じて、少しでもそんな動きに参加したりお手伝いできればこれに勝ることはないのではと思っています。

「八代まちなみ展」に微力ながら参加し、いろいろな方々と知り合いになれ、また感動出来たことを誇りに思うと同時に、参加して頂いた市民の皆様や、携わって頂いた各団体の皆様に対し、県職員の一人として厚く感謝申し上げます。

“祭”を成功させた エネルギー



八代市役所企画調整課
係長 上野 美磨

楽器の音が異様とも思える程の大きさとで鳴り響いた。

八代市総合体育館の大アリーナ。くまもとアートポリス'92 八代まちなみ展のフィナーレを飾る「アートポリス祭」の、本番一時間前のリハーサルである。八代市で始めて、市内の中学生、高校生による総勢300人を越える大合奏団が、この“祭”のために編成されたのである。

一つの曲が終るか終らないうちに、マイクを片手にした指導の先生の、心配というよりも少し興奮ぎみの声が響く。演奏がうまく合っていないようである。こちらの方も少し心配になっていた。本番の時、このような状態の演奏であれば、いただけないな、と。この日のため、幾度となく打合せをし、又準備を進めてきたサンシン企画の前垣さんをはじめ先生方のご苦労が報われないのでは、と。

ところが、本番になった時、これまでの心配は不要となった。力強いファンファーレで“祭”が始まったのである。子供達の顔がたくましく見えたのは私一人ではなかったであろう。

先のバルセロナオリンピックで、日本の中学生岩崎選手が若干14歳で最年少の金メダリストになったニュースは記憶に新しい。本番での子供達のすばらしい、不思議とも思えるようなエネルギーには目を見張るものがある。私はこの時、正にそのことを思い出したのである。もちろん、本人達の日頃の努力の積み

重ね、その指導者、又周囲の人達の協力が不可欠であることは言うまでもない。私は、この“祭”に参加してくれた人達全部に金メダルをあげたい気持ちである。

これからの“まちづくり”には、このような若い人達のエネルギーが大事なのではなかろうか。単体で動いても、すぐ止まってしまう。一つひとつの輪は小さいが、その輪が集まって大きな輪になる。大きな輪が動きだせば、おいそれとは止まらない。同じことが、これからの“まちづくり”にも言える。私は今度の“祭”を通して、人間の力の、いかに小さく、又いかに大きいかをまざまざと思い知らされたものである。

ある雑誌の中に次のような文章が載せてあった。

“イベントに参加することで責任を知る。だから、一方的なイベントではなく参加し一緒に苦勞することで喜びも増加するし、人も育ちます。”

“祭”を成功させたエネルギーに感謝。



人々が提案する街づくり

八代高専 土木建築工学科

教授 治部 睦郎

昭和27年の夏、大阪駅前再開発の基礎資料づくりのための現地調査があり、賃金日給二百円也のアルバイトに参加した。当時の大阪駅前は闇市の名残りの木造バラック二階建が主で、一階はお酒よそ、繊維製品を扱う商店と、飲み屋が混在し、二階はその倉庫や住居で一部には、青線といわれる怪しい売春宿がひしめきあっていた。一階の床面積よりも、二階の面積の方が大きく、路地の上にも建家があった。

それから40年、ようやく美しい街に変身した。その間には高さ45mの第一生命ビルは、数年前に建替えられもした。

当地八代駅前もようやく、道路の拡幅が始まった様である。扱て街づくりには郊外に新しく街をつくる新規開発と、古い街を新しくつくり変える再開発とがある。この二つの手法は、夫々別のものではなく、つねに平衡を保って進められるべきものであるが、往々にして新規開発、例えば工業団地、住宅団地、道路建設等は建設投資の爆発的な要求によって、驚くべき速さで建設される。

それに引替え、再開発は、一般的には金をかけずに、開発後の地価の値上がりで工事費をまかなうという方法をとっている。そのために再開発は長い時間が掛るものとされ新規開発と連動せず、一体として計画されたマスタープランも、再検討を余儀なくされているのが実情である。

従って当初からある程度の限界をもっていることを考慮して、マスタープランを作成することである。即ちマスタープランは一元的に長期20～30年計画をまとめ、4、5年ごと



にチェックしフィードバックするシステムが現実的である。

たゞ街づくりのマスタープランは、過去から現在までも、民間資本によるものでなく、多くは公共投資によるもので「中央が考え、地方が実施する」「役所が考え、民間が実施する」という役所仕事という路線が基本となつて作成されている。勿論、立場の相異はあるが、建築家・都市計画家が、住宅や、街づくりを提案し、発言を行い、そのいくつかは具体化している。

しかし現在からの“街づくり”は専門家がよく提案するような街づくりでなく、専門家以外の、一般の人々が提案する“街づくり”、現在の文化を継承し、それを拡大するという住民参加の街づくりが必要であろう。それには冒頭に述べた時間以上の、息の長い年月、辛抱強く、官民一体となつて、じっくり考えることであろう。

八代の夢（ビジョン） をつくらう！

八 代 高 専
教 授 黒 瀬 重 幸

アメリカの建築家、R. スターンは、「建築は夢の実現である」と述べている。その意味で都市は建築よりさらに多くの夢が交錯する場所といえるだろう。夢は時代とともに変わり、都市にはその痕跡が刻まれる。現在から未来へ、そして過去へ、夢は時間を越えて存在することができる。これらの夢は都市にとっては、生物体のD. N. A.（遺伝子情報）に匹敵するほど重要なものである。多くの良質の夢を持つ都市ほど魅力的な良い都市

といえよう。これからの八代のまちづくりを考える上でも、豊かな夢に思いをめぐらすことが大切であろう。

八代にもマスタープランに公に記された夢（ビジョン）がある。『みんながすすみたいまち、みんなでつくるまち』というキャッチフレーズと、「緑と水のうるおうまち」、「活力あふれる産業のまち」、「かおり高い文化のまち」という3つのビジョンである。これらの夢を実現すべく多くのプロジェクトが予定されている。でも、ほんとうは夢はもっとたくさんある。市民ひとりひとりがひとつ持てば10万の夢がある。もっと大切な夢に過去と未来の市民の夢がある。過去の夢は、歴史的な文化財や民話などに数多く埋もれている。未来の夢は子供達の心に無数に宿っている。夢は実現することによってより明らかで方針のあるものになる。個別の夢も語り合い見つけ合うことによってより大きく力強いものになる。八代市民みんなで自らの夢を開く時代になったと思う。

熊本アートポリス'92八代街並み展は、八代の夢を考える絶好の機会となった。やはりというべきか、夢は無数に彩り豊かにみることができた。絵画や図面、模型に表現された夢は見る人の心の中にさらに夢を広げて、大きく深く波紋を広げていくに違いない。これをきっかけに都市の様々な部分（地区、家庭、職場、クラブなど）で八代の夢を語って欲しいと思う。

夢にはよいところがある。それは発想を自由にし、偏りのないものにするからである。経済や現実にとのみとられるのではなく、幅の広い、時間の長い視野で考える余裕が夢にはある。私自身も都市の未来を経済ベースだけではなく、文化ベースにまで広げて、その再生を図っていくことがよいと考えている。まちおこしに最近よく使われる“活性化”の

英訳は、“resuscitation”である。この言葉は、長い時間に渡って、自立していけるように再生するという意味であり、決して一過性のものを指している訳ではない。まちづくりは夢をつくり、実現し、残していくことを辛抱強く続けることであろう。

今宵もきっとよいやつしろのゆめが見れますように……。



グルメとレジャーと ショッピングの街づくり

二之町振興会
(サンシャワー通り)

会長 山川 昭 三

戦前戦後を通じて本町三・二・一丁目・通町と共に二之町商店街も喜楽館（映画館）を核として繁栄して参りました。当時は衣料品店あり靴屋、下駄屋、酒屋、薬屋等、食料品店に至っては四店舗もあり非常に栄えて居りましたが、昭和三十一年に大洋デパートが本町二丁目に出店してから流れが変わり二丁目を中心に賑やかな商店街となった。又テレビの普及と共に映画館がさびれ当二之町商店街も一軒又一軒と店を閉める様な状態になり其の

頃より大型店（スーパー）が出現しユニード（現サンリブ）が長町に出店、ニチイ（現サティ）が西松江城町に出店、寿屋が通町に出店すると益々商店街から食料品店が消え、靴屋下駄屋、衣料品店が次々に消え物販の店が次第に少なくなって行った。先頃あるコンサルタントの話に依れば、今、日本国中に零細な小売店が160万軒あるが近い将来に半分の80万軒になるのではないかと……とのこと。今八代の商店街で二之町が一番変わりつつあるのではないだろうか。物品販売業が少なくなり高層ビルの飲食スナックビルが立並び「夜の歓楽街」と様子を变えつつある。それならばそれに合う街造りを、今、振興会の役員一同悩み勉強して居る処である。

計らずも此の夏、県主催に依る「アートポリス街並展」に、当二之町も参画したわけですが役員一同何回となく協議を重ねて決議したのが「二之町二十一世紀の未来像」と定め県立八代工業二年女子インテリア科の生徒にお願いし絵描いてもらう事になりました。或る程度の事はおちらより注文致しましたが、出来上がった絵は私達が思っても見なかった、球磨川の水を商店街の道路の真中に流し両側に美術館、映画館、劇場、レストラン等のビルが乱立した商店街を造る様な非常に斬新な奇抜なものが出来上がりました。

若い十代の生徒達の発想はこれから二十一世紀に向う若者の願いであり夢であろうと思う。二之町商店街もいづれは電柱をなくし電線を道路に埋没しインテリア科に女子生徒が絵描いた様な都市造りに少しでも近づいて行けたらと思って居る。

今二之町の街路灯が古くなり現在の商店街にそぐわなくなって来たので昨年より立替えについて提案して居る処であるが、何しろ高額なる寄附を各店より募る事になるので、役員一同協議を重ねている処である。



そして次に道路のカラー舗装、電柱埋没等と次々と二之町商店街のグルメとレジャーとショッピングの街造りの夢を実現させて行かなければならないと思って居る次第である。

然し乍ら、その実現には組合員及び地域住民の協力と行政当局の御指導が、なければ出来ない事で是非御指導御協力をお願い申し上げます。

商店街の町づくり

(本町三丁目商店街)

山 浦 滋 男

これまで、商店街の活性化を行なうために色々な方法で、八代市の商店街としての街づくりを行なってまいりました。

今回、熊本アートポリス'92 まちなみ展を行なった上で「八代の顔」とはなにか、これから先商店街が町づくりをして行く上で、どのような方法と方向で町づくりを行なわなければならないかを十分に理解してこれを実行しなければならないと思います。

その中の一つのポイントとして、人間の五感である「遊び、健康、芸術、知識、教養」を満たせる、それと同時に文化性を高めることが必要になってくると思います。

文化性とは、教養文化だけでなく生活や娯楽を含めた広範囲のものであります。

街をデザイン化して、楽しさと文化を提案して大型店にない地域に密着した街づくりを考えて行きたいを思います。

本街商店街においては、毎年タウンギャラリーという形で、街の美術館及び教養文化向上そして生活の提案の場として行なっていま

す。

それに今回アートポリス'92 まちなみ展は、同じ意味をもつものとして、又八代市の活性化のために、今後大いに役だてて行き、全国レベルのイベントとして努力していきたいと思います。

だが現実八代の我々が十分、街づくりを行なったといは十人の何人が満足しているのだろうかと思います。私くし個人の意見としては、見かけだけのものではないかと思います。

それよりも街の1ヶ所に市のトイレを作るとか、市が街が本当に市民の、そしてやってもらいたいものとは何かをこれから先に一つずつ積みかさねて行くべきだと思います。短期のイベントより長く形としてのこるもの、そして市民が喜こんでもらえるものを本当につくって行くべきだと思います。

プロ集団としての自覚

八代建築設計監理協会

会 長 豊 岡 幸 夫

くまもとアートポリス'92 八代まちなみ展の御成功誠におめでとうございます。

八代建築設計監理協会にとりまして発足してまだ五年という歴史の中で、このようなイベントに会員全員が一致協力して参加させて戴く事が出来た事は、大きな喜びであり、また大きな自信を持つ事が出来ました。官民一体でのこの様なイベントの成功は、今後の八代の活性化の一里塚となる事だと確信致している処であり、我々八代に根を張って生活する者にとりまして将来に対する希望の光が見えた様な気が致します。

さて、今度のイベントは我々建築業界に身を置く者の立場から申しますと、非常に意義深いものがあつたと感謝致している次第であります。特に今まで余り評価されなかった建築設計に対する認識が、市民の方々の内に深く浸透した点であります。伊東先生の設計された博物館も完成までの間で市民間の反応として賛否両論が有つたのも事実であります。

しかし建築物の良し悪しというのは、歴史と利用する側の意識によって証明されるものではないでしょうか。設計する場合は使用される側に添った設計というのも重要な事ありますが、公共性の高い建築物等に於きましては、使用される方々及び利用される方々の建築物に対する意識の啓蒙という事も必要な事ではなからうかという気が致します。伊東先生の博物館設計に依る毎日デザイン賞受賞という輝かしい事実が市民の意識を変えたのも事実であります。

建築設計という仕事は一般市民の方々にとりましては、実際考える過程は、ほとんど目にふれる事が無く完成した図面及び模型だけでの評価でしかありません。しかし建設という事になりますと形が出来上がって行く事実を目のあたりに見る事が出来ます。その為にどうしても建築設計あつての建設という意識が薄いのも事実であると言えるのではないのでしょうか。しかし今度のイベントで建築設計の持つ意義が市民の方々に認識して戴き、我々の業界の存在が八代に於いて大きくクローズアップされたのも素晴らしい収穫であつた様に思われます。

何はともあれ八代建築設計監理協会というプロ集団としての我々は、今後の八代に於ける街づくりに於きまして発注者の御要望に答えられる様日々研鑽し果敢に啓蒙説得出来る様努力し、又将来に対する大いなる夢と希望をもって進めば必ずや未来は開けるものと、

このイベントを通じて再認識した次第であります。

意 識 改 革

—文化都市八代を目指して—

八代美術協会

会 長 山 下 益 雄

八代のまちづくり・街の活性化が叫ばれて久しくなる。近年になってこれ程まで、実に多くの講演会やシンポジウム・トークン等が開催されたことは、かつてなかった。そして又、引き金としてのイベントも、行政指導型、民間サイドと次々に展開されている。

今回のくまもとアートポリス'92 八代まちなみ展も行政指導ではあるが、八代中心部の街を廻廊とした文化イベントであつた。このイベントも御多分に洩れず、アートポリスに乗せて、八代のまちづくりに対する意識に啓蒙ではなかったかと思う。

ところで、多くの講演会、シンポジウム等、日本古来の舶来崇拜的な面を、やゝ、感じないでもないが、外から見てのご意見、批判、提案は大いに聞いてしかるべきである。

しかし、八代を愛し、八代に永住して八代を一番よく知っている地元の人々が、もっともっと21世紀の八代のまちづくりについて、口角あわを飛ばして討論すべきではないかと思う「現代の彦一出でよ」と言いながら、今だに外来崇拜が伝統的に根強く残っているとすれば、八代のまちづくりや活性化は、時間がかゝるのではなからうか。

まちづくりの話となると、例外なく、山と海と川、自然を生かした景観づくり、歴史をふまえた文化環境、経済生活に根ざした近代



そしてまた、近年益々建築物の質の向上が求められるとともに、機能の複雑化、技術の細分化・専門化が急激に進んだ結果、如何に巨匠と呼ばれるような人でも、一人で建築物の設計や工事の指導監督業務を完遂出来る時代は去った。芸術と技術を統合し、多くの人びとの知恵と感性を結集し良質の建築物を実現するために、設計士に対しても、深い知識と高度の技術と、磨かれた人間性と、与えられた使命を全うするために、日頃の研鑽はもとより、各種イベントに積極的に参加する姿勢が強く要望されるときでもある。今回のくまもとアートポリス八代まちなみ展に参加したことが、町づくりに対する設計士の大きな研鑽の場であったと深く感謝しています。

建築を地域全体の視点から

下野建築設計事務所

下 野 健 一

八代には、球磨川という日本でも有数の川が流れている。その川の辺に事務所を構えて、仕事をしている為、毎日その姿を眺める事ができる。それは四季折々に様相を変え、時には平常心を思わせる穏やかさを見せ、時には激しく顔色を変え荒々しく怒りの表情を見せる。

先に開催された「くまもとアートポリス八代まちなみ展」において、そのイベントの準備の為、何度となく、市内の各種団体・各種商店街の方々と話し合いをもつ機会を得られた。

当初は、アートポリスという建築の専門色の強いイベントにどれだけの人が理解を示し協力していただけるものかと、非常に不安を

感じたが、それも回を重ねるたびに逆に期待へと変わり、我々建築にたずさわるものにとって、日頃気づくことのない、貴重な意見を得られ、そして、それらの方々全ての協力によって、八代の大きなイベントとして成功を得る事ができた。

近年さかんに叫ばれる“まちづくり”の中で、直接その一端を担う建築士にとって、このイベントのプロセスは、大きな役割をもったと思う。日頃、見なれ、聞きなれた事柄あるいは、単一の敷地の中のそれぞれの建物についての研究、議論はできても、一番身近な自分達の住んでいる地域の環境や、その未来についての意見や主張には、ほとんど乏しいのではないだろうか。

八代市を他県の人に紹介する時“球磨川”という単語は、簡単にでてくるかと思うが、その姿・印象、あるいはそれが与える市への影響となると、なかなか語れないのではないだろうか。

私は、今回のイベントを通して、これからの八代の建築は、一、建築士の主張や夢の表現によるものではなく、あくまでも地域全体を広い目で眺め、地域住民あるいは、各種団体、文化人等との密接な意見の交換の中に生まれてくるべきではないかと痛切に感じた。

八代にも“まちづくり”にいろいろな意見を持ち、その活動もすでに、始められている方々がたくさんおられる。我々建築士も、建築という立場を通して、いかにそれらの方々に協力していくか、今後の大きな課題である。



官民協力で地域としての町づくり

建築設計監理協会

澤 田 修

くまもとアートポリス'92 八代まちなみ展に参加して、八代の商店街（本町一丁目～四丁目、二之町、宮之町、通町）の現在の姿に改めて触れ、考える機会となった。

商店街の形態のうち、街路に関する部分だけで見ると、歩行者専用（自転車を含む）道路と車の進入する一般道路、又、アーケードの有無等に分けられる。

今回、アートポリスのイベントを行なうにあたり、街路の形態の違いで、行う事の出来るイベント内容が大きく違ってくる事に気づいた。通りを利用する場合、歩道がなければ出来ないし、雨の日はアーケードがないと行なえない。取扱う商品が違えば、通過する客層も違ってくる。

商店街の街路の形態として、理想的に考えれば、やはり「歩行者専用」少なくとも「歩道」は必要であろう。八代の商店街（前記）で考えてみれば、

- ・通り抜け交通の減少
- ・一方通行の整備による迂回の減少
- ・隣接する駐車場の整備

現在のマイカー優先社会では必要不可欠な問題である。

以上の事を考えてゆくと、一つの建築物、一つの商店街という問題でなく『都市計画』つまり、町づくりという事に行き着く。

商店街が、将来どんな街に変わっていくのか。発展するにはどんな町にすればよいのか。

町全体が、これから色々な事を学び、考え変換していかなければならない。

アートポリスのイベントをきっかけに、多

くの意見を集め、行政、民間が協力して、地域としての町づくりが少しでも前進していく事を期待するものである。

私なりの町づくり

杉本設計事務所

杉 本 靖

トレペを原稿用紙に替え、用紙三枚以内という事で、ずばり今回の経験を通じて、自分なりに感じた事を述べます。

「自分の町が、好きか？」自分の町に愛着があるかどうか、そんな基本的な事が、本当の町づくりの中で、重要なものである事を、感じました。世の中誰も以前に比べ豊かになりました。設計事務所の時間の長いのは別としても生活にゆとりが、できました。行政も公共施設、道路、下水道等満たされてくると次は文化面での都市づくりが、住民意識も含めて、今时期的な機運の中にあると思います。

町が、好きになるには、まず町を知る事、歴史、行事、文化、生活、何でも良いから興味のある事を知る事、それが、一番です。目に見えない物に投資するのは、誰でも好きではないでしょうが……。行政サイドから、目新しい物を作るのではなく住民意識を高めるための文化面での手助けが必要ではないかと思っています。

逆に住民サイドからみると、子供達は遊べない町で大人になっても、町への愛着はなく、人の交わりもないそんな所に町づくりが生まれる訳がないでしょう。豊かになった今こそ皆が、少しだけ我慢して、古き良き文化を再



認識するのも良いかと思います。

日本の生活文化は、自然を受け入れそれに適応していたのですが、最近では、個室化、空調化によりそれが、より文化的健康的生活空間と思っている様です。人が、空気を吸って、生きている事さえ忘れていた様な住まいもあります。もっと自然に帰り、風や人の気配を感じる空間こそ文化的であり隣りの芝生が、気になるくらい開放的になると、もっと人間関係が、うまくいくのでは、ないでしょうか。

町づくりにとって人間関係は、大切なものです。自分の町が好きという意識を共に持つ環境を作るのは、日本人の持つ奥床しさや、遠慮深さで、少し我慢さえすれば、もっと良くなると思います。言葉は悪いのですが、日本人の新しいものに適した建売群のてこぼしの屋根並より、長い間そこに培われた生活、凡習、自然環境により作られた葺屋根の美しさは周囲環境に調和し安心感さえ感じられるものです。自分の町を知り、考え、もっと興味を持ち、人との交わりを大切にすると、自然に湧き起こるものと思います。



個人的な事ですが、毎日日夜製図台に向かう関係者にも反省すべき点があるかと思えます。経済性、採算優先の開発、高層化、素晴らしい自然の中にあるシンボルタワー、ランドマーク、そして展望台、人間の高さへの欲望でしょうか？高い所からの景観の独占は、反対に景観を損うものです。景観は共有財産で

あります。

高層ビルは、人を威圧し権力を誇るかの様に見えます。高層ビルとまでは、いかなくても個々の建築にとらわれ、時として個性の強い物を作る事が、設計者の手腕の様に思われる節がありますが、周囲環境を常に考慮し人に優しい建築を作る事も自分達の職能であると感じます。「八代の町が好きだ」と誰しも思う様な町を市民皆で作しましょう。

我々も市民と一団に

まちなみギャラリー部会
TAU建築設計事務所

小林 慶 助

近年、「熊本アートポリス」(KAP)の言葉を、聞くようになって、早くも4年の月日が経ち、しだいに市民の意識の中に、広がったかのように思われますが、まだまだ一部の人の目にしか、止まっていないようです。大きな建物、たとえば、熊本市の北署、三角港「フェリーターミナル」、玉名市「ふるさと展望館」、湯の前「まんが美術館」、八代の博物館等は何度もマスコミに、取り上げられ、実際おとずれる人も多いでしょう。しかし小さな町の手作りの街づくりとなると、少数の人の関わりになりやすく、地道なPRが必要でしょう。

市民全員の参加を目指して、「熊本アートポリス'92 八代まちなみ展」が、開催されました。私達建築士会員も、町内の人々と共に「ギャラリー展示」を手がけました。私し個人としては、三丁目の担当で4月初めごろから準備をし、人の目をひきつけ、足を運ばせるには、どのように作り上げていけば良い

か……これからも続く課題のように思えます。通町では、高名な画家、ススムサカグチさんの助けにより、明るく芸術的な雰囲気が出されました。思いがけない画家の出現に高校生達は目をかがやかせて、シャッターや壁に色色色の夢を広げて行きました。あざやかな色彩が街づくりに活を入れてくれているようです。

二之町では未来の商店街を夢見て、八代工業高校の生徒さんたちが、パネルに理想の町を絵描き、又八代高専の学生さんは、二丁目アーケード構想の模型、八代駅前再開発及び日奈久再開発の希望に満ちた、海洋レジャーランドを彷彿とさせるヨットハーバー等の模型が製作されています。未来を背負う若者の参加は、たのもしいかぎりです。

宮之町は、八代の伝統的祭り、妙見祭を知ってもらおうと、笠鉦の展示、三丁目では妙見祭行列の箆の展示及び八代の歴史の流れ、今昔（写真）展などを行ないましたが、今思えば準備が、お盆の時期と重なり、十分な準備が行き届かず、実際展示してから気づく事が有り日毎に良くしようとして来ました。又、次回4年後のKAPが楽しみです。各町内の展示内容は、違っていても、目ざす事は一つ、町づくりのきつ掛けになればと、1人1人が願っている事と思います。

我々、建築士にとっても、これからの八代に根ざした地道な活動を重ねて、そこに住む意味と満足感を感じることのできるような、市民と一団となった街づくりを期待したいと思います。

欠点再発見のすすめ

大田黒建築設計事務所

大田黒 元 雄

私事で恐縮ですが、私は20代始めの頃まで航空自衛隊に所属した経験があり、仕事柄日本全国を渡り歩きました。その頃の見聞談です。

兵庫県の山奥の過疎地での話で、その村の全体戸数は24戸、電気無し、史跡名所無し、舗装道路無し、若者無しのいわばないないづくしの貧乏な寒村が、一躍有名リゾート地となりました。しかも企業系デベロッパーはいっさい無しです。

その魔法の種は、一体なんだと思われますか、答えは簡単で、つまり何もないということをしてPRしたのです。方法論として村を取り囲む山の一部に小屋を作りました。その小屋たるや、まず木の上にあり、その材料はその辺の立木ろ薦かずらで造られており、村の爺さんばあさんが総出で造ったという、限りなく総工費が0に近いトムソーヤ風の宿なのです。

八代に帰って来て、約10年になりますが、まず気が付いたことは、八代に欠点は幾つもの口に出すが、その欠点は実は宝石の原石であると感じている人が少ないのです。先に書いた事例は八代には全く当てはまりません。がしかし学ぶことは多いのです。欠点をハードでとらえるのではなくソフトでとらえてみた時全く違った答えが多々発生します。

熊本市と八代市を比べてみたとき、東京と大阪の関係に良く似ています。大阪の再活性は、テレビ雑誌等で、専門家が数かぎりなく発表しています。これらを見ればただで一流のコンサルタントに仕事を依頼したのより、

もっと多くのヒントを得られることと思います。

私は八代が好きです。もっともっと八代は素晴らしいになります。今回のアートボリスはその先駆けと私なりに考えます。各団体の方の手作りによるイベントは私が考える以上に物凄いことだったのかもしれない。

最後に教訓を込めて、前例のその後を書くことにいたします。

その貧乏な寒村は次第に裕福となってゆき若者がUターンし活気が戻りつつありましたが、ある日を境にし道路が広げられ、舗装されバスが通り、観光客のためにレストランができて、今風のペンションができました。そして観光客は来なくなり、又もとの貧乏な寒村に逆戻りしたそうです……………。

追＊これは実話です。

町を掃き清める

鹿児島大学工学部

教授 土田 充 義

町を住みやすくするにはどうするか。活性化するにはどうするか。知恵を出し合って、どのまちでも町づくりに励んでいる。八代市も八代城と博物館からのまちづくりで見学会とシンポジウムが開催された。大変盛大であったし、傾聴すべき基調講演であった。これを契機に八代市がどんな町になっていくだろうか。それには倦まず弛まず市民一人一人が自分のことからする。結局は市民こそ町づくりの主役だからである。

私はどうしたら町づくりができるのか正直に言って分からない。自分の専門を大切に押し進めるしか方法がない。その方法で密集した住宅郡を一棟一棟復元工事を行なったこと

がある。合計七棟であったが、一棟に四世帯が住んでいたこともあって、二十世帯以上が住み、そこはスラム化していた。ところが復元工事を終えるとそこに住んでいた人々は誇りをもって、そこに住んでいたことを口にするという。これこそ町づくりだといわれたことがあった。ただ住宅を当初の形態にもどすために夢中になったことだけである。いってみれば重要な部分を保存し、改造した部分や不必要な部分を切り捨てたにすぎない。それは汚れ物をかたづけ、町を掃き清めたことに似ている。それ以来町づくりの最初は町を掃き清めることだと思ふようになった。ゴミが落ちていない町、きたらしいものが目につかない町、それはすばらしい。最近早起きして散歩するとゴミを拾っている人を見かける。これこそ町づくりをしている方だと思う。これとは違って、町を美しくするシステムが大切だという。つまり清掃会社が町のゴミをかたづけ、掃除する。運べないゴミや燃えないゴミをかたづけることは必要だろう。それだけに頼っているとそこには市民参加がない。町づくりの主役であるはずの市民がいないのであれば、意味がない。やはり私達が町を掃き清めようとするところから第一歩が始まるのではないだろうか。

八代のまち

九州産業大学工学部

教授 佐藤 正 彦

八代を訪れるのはこれで三度目である。最初は同僚の不幸に接して、二度目は人吉への乗り換えの時に降車してみた。今回は「これからどうする八代の町」シンポジウム（八月）に参加するためである。



「八代」と聞けば、歌手八代亜紀の・・・と極めて発想貧困であった小生も、一度目はい草の産地であることを、二度目は妙見宮神幸行列祭りを知り、そして今回は城下町であることを知ることになった。

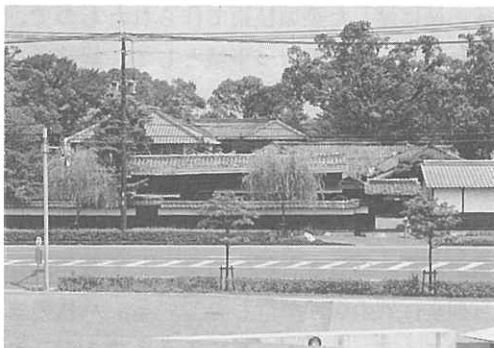
旧八代城の石垣の最上部に立つと八代の町の全貌がおぼろげながら把握する。地図を片手に目をはせると碁盤目の道路や所々にます型の小路が確認される。その両側には、木造住宅にまじって、鉄筋コンクリートの低層ビルも目につく。そんな町並みの中に昔ながらの和瓦の屋根がかなり残っているが、残念乍らそれらの建物はそれ程古いものでない。ふと眼下に目をやるとかなりの広範囲にわたって一見古めかしい瓦屋根が残っているのが目につく。松浜軒である。

松浜軒は、八代城主三代松井直之が元禄元年（一六八八）生母崇芳陀尼のために建立したお茶屋である。当初はこのあたりまでが八代海で、海が見渡せる浜辺であったという。松聲も聞かれたところからその名がついた。俗に「浜のお茶屋」と呼ばれたりする。

一方、左方に目をやると、ピカピカの八代市立博物館がまぶしい。道路より小高いところにたつせいであろうか。何やらラメ飾りのついたドレスを着て、舞台に登場した何かのようでもある。ラメ飾りの服が好きな人もいれば、嫌いな人もいる。それが似合う八代亜紀さんの影響がこんな所にも出ているのかな？ふとそんな気を起こさせる博物館である。設計者は現在建築界で活躍している伊東豊雄さんだが・・・。率直に感想を述べれば、小生はラメ飾りがにがて派なのでどうしても松浜軒のようなシックな、シンプルな建築を好ましく思うのは否めない。（おじさん現象かな）。

和瓦を多く用いた伝統的な日本建築で旧八代城周辺の町を埋めつくすことはもう実現不可能な夢なのかも知れない。が、「変化よゆ

るやかに・・・」と建築史家は心の中でつぶやくのである。



文化の継承と歴史のまち八代

八代市教育委員会文化課

原 田 聡 明

どんなに時代が変わっても、変わらない八代らしさとは何であるのか。

八代のまちを特徴付けているもので、あまりに身近すぎて気付かれていないことがある。それは、江戸時代の城下町の街路形態が現代の八代の中心部に、よく残っていることである。整然とした碁盤目状の武家屋敷の町割りや塩浜堤防の名残りのゆるやかに彎曲した道路は、人の手の暖かささえ感じさせるものである。この都市の形態が歴史的に形成された八代城を中心とする城下町にあることが一つ



の八代らしさであると考えられる。この八代城は、江戸時代の始めのころ、元和年間に完成の域に達した築城技術で作られたもので、海に面した港湾をもつ平城として、経済的な都市経営を十分考慮に入れた優美な城郭であった。この八代城と城下町が、現在の八代の都市の礎であることは、云うまでもない。

いま一つは、九州三大祭として名高い妙見祭がある。ふるさと創生事業として数年前から神幸行列の復元が行われている。八代のまちのアイデンティティを語るうえでこの二つ



は、欠かすことの出来ないものである。歴史と伝統ある風格のあるまちとして発展するためには、この二つは重要な要素であろう。

妙見祭の神幸行列には、獅子や奴、亀蛇などが奉納されるが、その中に9基の笠鉾がある。この笠鉾は、それぞれの町内から出されるもので、笠鉾を持つ九つの町内は、八代の城下町の大部分を東から西に形成しており、現代まで都市の中心部に城下町の形がそのまま残っている所以でもある。笠鉾を中心として各々の町が一つにまとまり、江戸時代の伝統文化を今に伝えている。笠鉾自体が、町のコミュニティの中心ともなっている。これは、熊本県下は基より全国でも珍しい事例である。

くまもとアートポリス'92 八代まちなみ展の一環として、笠鉾「菊慈童」の宮之町で笠鉾をテーマとした展示が行われた。「菊慈童」の人形や豪華な刺繍の水引幕、彫刻や絵画の

伝統工芸の部分品等の他、写真や図面が展示された。特に笠鉾の中が見えるように工夫して、途中まで組み立てたものは、遠方より見学に来た若者達の目を引いていた。まさに歴史と伝統に裏打ちされた町の誇りを展示するミニ博物館であった。これは、年に一度の祭の時期にしか見ることの出来ない笠鉾を、美術工芸の文化財として部品のままでも展示することができることを示している。

仮に、九つの町内でそれぞれの笠鉾の常設の展示が可能であれば、市立博物館と八代城跡を中心として、城下町の配置のままに、それを一つ一つたどりながら散策する新たな観光コースができることになる。大型バスでさっと来てさっと帰るだけではなく、まちの中心に滞留させるための仕掛けとなるものと考えられる。

妙見祭の笠鉾の他、獅子や亀蛇等の町々の文化財をこれからのまちづくりにどのように生かしていくのか、歴史と伝統に育まれた薫り高い文化のまちとして、そのポテンシャルは高いと云えよう。

あとがき

市民パワーをまちづくりに —あとがきに代えて—



高瀬 隆三郎

「手作りのアートポリスを、今、八代に住んでいる人達の手でやろうではないですか」。これが92年1月に“くまもとアートポリス'92 八代まちなみ展”への参加を呼びかけた時の口説き文句である。

まちなみ展の趣旨はこうだ。アートポリスの「建築」は、自分達の生活感覚とかけ離れていると、一部の市民の反発を招き、無関心層を増大させている。この反発、無関心を真正面から受けとめよう。市民とアートポリスの「建築」の間にある垣根を取り払い、問題の所在を明らかにしようではないか。

同展は八代の他に、熊本市と小国町が開催地。その企画をする専門部会の委員となり3地区の担当者を決めることになった時、八代の担当を立候補した（もう一人は、三浦好氏）。生まれも育ちも八代市紺屋町（現・福岡）。親兄弟を含めて、自分を育ててくれたまちに恩返ししたかった。

幸いに八代にはアートポリスの中でも出色の傑作である伊東豊雄氏設計の八代市立博物館・未来の森ミュージアムがある。それをバネに、自分達のまちづくりの夢を、まちの未来像を、今、八代に住んでいる人達の手で表現したらどうか。超一流の文化・芸術を知ること大切だが、自分達のまちにどんな人がいて、「八代のまちづくり」に回けて力を合

わせたらどうなるか。例え稚拙であろうと、自分達の文化を肌身で知ること、真のアートポリス＝文化の都、芸術の都を実現する上で、きわめて重要なことだ。

それがどのように実行されたか、その結果がどうなったか、は今回のイベントに参加していただいた数多くの方々の胸の中にある。八代に「八代まちなみ展」の企画を持ち込んで、わずか8ヶ月で、75団体が参加する一大イベントに成長した。その間の多くの方々の努力がどれほどのものであったか。その成果を見た人達が、どんなに八代市民の団結力、パワーに驚いたことか。

その一部が、この記念誌としてまとまった。「八代まちなみ展」での盛り上がりや「これからのまちづくり」のエネルギーにつなげていきたい、という多くの方々の願いがこの本には込められている。

八代市民はよく「八代はイッチョン変わらん」と嘆く。でも今回示されたパワーを見る限り、変革へのエネルギーは十分過ぎるほどある。問題は、どう目標を定め、そのエネルギーを組み上げて行くかだ。この本は、そのためのメッセージである。

八代展に、また、記念誌に込められた「これからのまちづくり」に対する希望が、ひとつでも多く実現することを祈念し、この本を終えたい。

なお、寄稿文を掲載するに当たり、表題を編集者の独断で付けさせていただいた。お許しいただきたい。

最後に、忙しいなか、文章を書いていただいた方々を代表して一言、「八代は本当に素晴らしい」。



編 集 くまもとアートポリス'92
八代まちなみ展実行委員会

発 行 くまもとアートポリス'92
実行委員会

発行日 平成5年1月25日

印 刷 ク ギ ャ 印 刷

- ☐ 総合記録
- ☐ 都市デザインサミット
- ☐ アートポリスフォーラム
- ☐ デザイン・コンペティション
- ☐ 熊本まちなみ展
- ☒ 八代まちなみ展
- ☐ 小国まちなみ展

**KUMAMOTO
ARTPOLIS '92**

